

「授業力」をつけるためのビデオセットの開発

—いつでもどこでも研修に活用できるビデオと資料のパッケージ—

教育改革の進行とともに教員研修の目的や内容もまた変わってきている。個々の教員のニーズに応じた研修が必要とされ、また研修方法の多様化も進み、質の高い「いつでもどこでも」できる研修の在り方が求められている。

本研究では、研究協力員の授業を素材に、ビデオ記録を利用した研修のためのコンテンツ開発をめざし、そのための編集の在り方やまとめ方について検討した。短時間で内容の深い研修ができるための授業ビデオセットの開発に取り組んだ中から見出されてきた、より効果的な授業記録の在り方、編集の在り方、活用の方法について報告する。

目 次

はじめに	1	第2節 編集の方向	
第1章 これからの教員研修に 求められるもの		(1) 研修の目的に沿った ビデオの切り出し	12
第1節 教員研修の現状		(2) ビデオセットの構成	14
(1) 研修の多様化	1	第3章 より充実した研修のために	
(2) e-Learning の広がり と ビデオの活用状況	2	第1節 効果ある研修ソフトを求めて	
第2節 授業ビデオを利用した 研修についての仮説		(1) 研修視点の明確化 = 一次編集から二次編集へ	16
(1) ビデオによる研修の効果	3	(2) 視聴しやすい工夫 = 二次編集の第二工程	22
(2) ビデオ制作 6つのキーワード	4	第2節 よりよい活用のために	
第2章 取材と編集の実際		(1) 研修会での実際と 再修正(三次編集)	26
第1節 取材の実際		(2) 今後のために	28
(1) 「授業」を撮るための視点と工夫	7	おわりに	30
(2) 取材活動の実際	10		

<研究担当> 中 嶋 弘 行 (京都市立総合教育センター研究課研究員)

<研究指導> 外 川 正 明 (京都市立総合教育センター研究課指導主事)

<研究協力校> 京都市立伏見住吉小学校 京都市立六条院小学校 京都市立高倉小学校

<研究協力員> 坂本 香代子 (京都市立伏見住吉小学校教諭)

久保田 潤子 (京都市立六条院小学校教諭)

林 正 和 (京都市立高倉小学校教諭)

はじめに

子どもたちの理科離れや読解力の低下といった話題が新聞をにぎわすなど、学校教育や教職員の姿勢に対する社会的なまなざしには厳しいものがある。

私たち教員は、「指導の重点」に示されているように、「子どもの実態を的確に把握し、子どもを支え、励まし育てる姿勢と、指導すべきは指導しきる姿勢を持ち、基礎・基本はもとより、自ら学び、自ら考える力などの生きる力を身に付けさせるよう、日常の授業改善に努める」(1)のは当然のことである。すなわち、すぐれた指導力、とりわけ「授業力」を身につけて日々の授業の「質」をよりよいものにし、様々な教育課題を解決して、子どもや保護者の期待に応えていかねばならない。そして、この課題解決のためにこそ意味のある研修の機会が必要である。

私たち教員の側から見ても、研修の必要性は日々痛感している事柄でもある。中には様々な課題や問題をかかえこんで日々を送っている子どもたちに対してどのような指導の在り方がよいのか迷うことは多い。その意味で、授業を組み立てていく上で教材研究や指導法の実践的な研修は、切実な課題でもある。

校内でも校外でも他人の授業から学び、刺激を得て教室に帰ることはよくあるが、それをそのまま見てまねをしてみたところで、同じ授業は再現できない。授業を見ることとは、自分の日々の授業改善のために参観した授業をどう取り込んでいくかに気づくということである。その気づきのために、授業をビデオ記録して研修に活用するという取組が多く行われてきた。

カリキュラム開発支援センターには、本市の教員から提供されたビデオ記録「十八番授業」を中心に多数が所蔵され、貸し出され続けている。こういった資料が求められているところからもわかるように、授業をビデオ記録して提示するという方法は、授業の内容と方法を学んでいく上で大変価値の高い研修資料である。

そこで、本研究では、コンパクトで研修効果の高い、資料とビデオをパッケージ化した「授業ビデオセット」を開発し提示する。第一章では、研修、とりわけビデオを使った研修の効果について整理し、第二章では取材と編集の過程や在り方について報告・検討し、第三章では今回の制作について振り返り、これからの研修の在り方について展望したい。

第1章 これからの教員研修に求められるもの

第1節 教員研修の現状

(1) 研修の多様化

日々の教育実践を積み重ねる中で、私たち教員は、誰もが「よい授業をしたい」「楽しい授業がしたい」「子どもにわかる授業をしたい」などといった望みを持ち、校内研修をしたり教員間で情報交換をしたりするなどして、授業力の向上のための努力を続けている。また、校外で行われる様々な研修会にも参加し、教育の在り方や子どもとの接し方などについても考え、悩み、自分を鍛えようとしている。日々の自己研鑽とともに、こうした研修会のような公的に開かれるものに参加することによってもまた、研修は深められていくものである。

本年度「学校指導の重点」でも「指導力の向上を目指す研修計画を作成し、校・園外における研修会にも意欲的に参加するなど自己研鑽に励む・・・(中略)あらゆる時に、あらゆる場所で、意識改革に努める」(2)ことを意識し行動すべきものとして位置づけている。

日々、教員の当然の仕事として教材研究を行い研修を積んではいても、教育改革の進行とともに教員研修の目的や内容にもまた新たなものが求められてきている。そのためにも、研修の必要性は極めて高い。

地方公務員法第39条では「職員には、その勤務能率の発揮及び増進のために、研修を受ける機会が与えられなければならない」と明記されており、教員としての研修は保障されているとみることができる。かつては日常の研修として、先輩教師から後輩への校内での「手ほどき」のような形で行われていたが、そういった個別の研修ではなく、組織的に取り組むことが求められてきた。

北尾倫彦は「そういう技術や知恵の伝達がインフォーマルな形」(3)でうまく伝えられていないようであれば、校内研修というような「フォーマル」な形で、きちんとした伝達を行うことの必要性を述べていた。そうした必要性を踏まえて「フォーマル」な形の研修をする機会はかなり多くなった。しかしながら、近年、教員の個別に求める研修内容が異なることもますます多くなってきていて、「フォーマル」な一定の形での研修に加えて、ますます個別に対応できる研修の機会が今一度「手ほどき」のようなものに立ち返って必要になるといえるのではないだろうか。

また、教員はそれぞれに異なった研究歴や個性を持っていることから、対象として選ぶ研修の内容や方法、興味などは一人一人異なったものになる。そうした個別の研修に対応するためには、個々の教員の求めや課題に応じた形の研修が用意されるべきであるだろう。

根木屋由規は「これまでの座学中心の一斉講義型から、個々のニーズに応じた研修へと転換する必要」(4)があるとしているが、このように、個々のニーズに応じるということは、個々の研修課題に合った研修資料が用意されているということであり、多様な資料を提供できる環境づくりが求められることである。

(2) e-Learning の広がり と ビデオ の 活用 状 況

先に述べたように、研修のスタイルの見直しが進められている中、根木屋由規は「個別の課題や求めに応じたものが整理して提示されていることが必要である」(5)という。だとすれば、多様なテーマで制作された研修用資料が用意されていることが重要だろう。

日常的な教材研究という点から研修を見ると、指導案の検討や教材収集、教材製作に加え、授業記録ビデオを視聴するという方法がある。学校では、放課後にも会議や児童への個別指導などが多く、全職員が一堂に会した研修の時間がとりにくい実情もある。その中で、少しでも時間を有効に利用したり少人数で教材研究したりといったかたちで、ビデオ視聴による研修もまた広く行われている。この研修用にも利用できるビデオ資料として、カリキュラム開発支援センターには、「私の十八番授業」のような授業記録を収録したビデオライブラリを中心に、現在約 500 本あまりが収録され貸し出しも行われている。

また、ビデオ配信による研修も広く行われている。文科省では「エル・ネット」を整備している。このシステムは、文科省からの一方的な放映だけでなく、「適時に施策説明を行う『文部科学ニュース』や、省主催の各種会議や説明会を同時並行で放映」している。同時に、「さらに、道府県等の教育センターなどに整備されている送受信機能を有する 29 局の VSAT 局(送信局)からも、地域の教育の取組の紹介や研究発表会が放映される」(6)というような、双方向性を生かした通信がなされている。

このように「エル・ネット」は、双方向通信ができるため、多地点からの送信による遠隔学習が可能になっている。加えて、遠隔地同士での質疑

応答や交流が実現できるようになっており、興味や目的を同じくする人にとっては相互研鑽が容易になり、研修を深めることができるように設定されている。このことを活用すれば、日常的に幅広い研修ができるし、カリキュラム開発支援センターでもその講座の多くを実際に収録して貸し出ししている。

こうした研修用ビデオ資料には、視覚聴覚に訴えるという特質があり、文字言語にない部分の情報をもっているということが挙げられる。このため、研修資料としての価値は高いものであるといっていだろう。それでも、ビデオテープの貸し借りのために、人の移動といくらかの時間が必要であったり、他に貸し出されていたりすることがある。「いま研修したい」「いま知りたい」「いま必要だ」というような要求には応えられない面を克服し、ビデオ資料をより効果的なものにする工夫が求められている。

そうした「いますぐ」という要求に応えることのできるのが、オンデマンドのビデオ配信(Video On Demand, VOD)という方法で、ネットワークを通じてビデオファイルを端末のコンピュータに届ける仕組みである。VOD が利用されはじめていた背景には、いわゆる IT 技術革新とコンピュータの普及がある。パーソナルコンピュータの性能の向上に伴い、コンピュータ上で動画を扱うことが容易になってきた。コンピュータ上では動画もファイルとして扱われているから、ネットワークを通じてリクエストした端末に対して、サーバからビデオファイルを送信することもできる。

e-Learning という概念と方法の登場は、そういう実情や要求に応えることであった。e-Learning とは、おおまかには WBT のことを指すと考えてよい。広い意味ではネットワークを利用した学習ととらえてよいが、e-Learning についての総合サイトである Asia e-Learning Network (7)では、e-Learning について「もっとも普及している方法は WBT である」と述べている。図 1-1 には AEN による WBT の概念図を示しておく。

VOD やそれに関連する資料をインターネット上のサーバから呼び出して学習に使うスタイルを WBT(Web Based Training)と呼ぶ。インターネット上には多くの WBT サイトがあり、光京都ネットのサイトでも e-Learning として教職員研修向けの教材が用意されている。そこでは参加者が主宰者サイトに会員登録し、呼び出した VOD を使って個々の課題に応じて学習を進めるという仕組みができています。さらに電子メールやビデオ会議など

のツールを用意して、参加者へ個別の対応ができる環境を整え、研修の意欲と効率を高める工夫をしているところも出てきている。

中原淳は「大学が設置した数ある eラーニングサイトのなかでもっとも歴史が長く、成功事例との評価が高いサイトのひとつ」(8)としてスタンフォード大学の Stanford online を紹介している。ここでの e-Learning は

①オンデマンドの講義ビデオの視聴

②電子掲示板によるフリーディスカッションなどが組み合わせて構成されている。

この概念は、今日ではインターネットの上で一般的に広く行われている、電子掲示板を使った交流によく似ていると考えていだろうか。ただし、ログインに認証手続きを経る「会員制」で接続され、誰もが無条件で利用できるものではないという点が、一般に広く使われている電子掲示板とは異なる。

e-Learning が実用化されている例として、東京工業大学・赤堀侃司研究室の取組を、平成 16 年度視聴覚指導者講座で聴いたので抜粋して紹介する。

「自分の授業を記録しておいてそれを自由に視聴できるようにインターネット上に公開しておく。インターネット上の電子掲示板を通じて学生との交流ができる仕掛けを用意しておく。アクセス(接続)記録を調べてみると、土日でも夜中でも接続してきて自分の学習に使っている学生がいることがわかる。電子掲示板を見ても、人が寝ているような時間帯に書き込まれているものがある、自分の力で学生は時間を見つけて学習している。そう

いうスタイルの学習は、『いつでもどこでも』を可能にする、インターネットを使った e-Learning システムが構築されているから実現できる。いつでもどこでもできる環境を与えると、学生は自ら選んでその中で勉強している」(9)という。学生の勉強と職員の職務としての研修は同列ではないにせよ、e-Learning という形態の学習環境の整備が人をどう動かすかという点から見て示唆的ではないだろうか。そのようにみると、こういった形態で研修を行うことができる仕組みを整えていくことは、研修をとっても身近なものに変えることができ、今後ますます重要になるだろう。また、学習環境の整備と同時に、その学習環境を使って実際に研修できる内容(ビデオソフトを含む研修用コンテンツ)そのものの充実もまた重要になるだろう。

第 2 節 授業ビデオを利用した研修についての仮説

(1) ビデオによる研修の効果

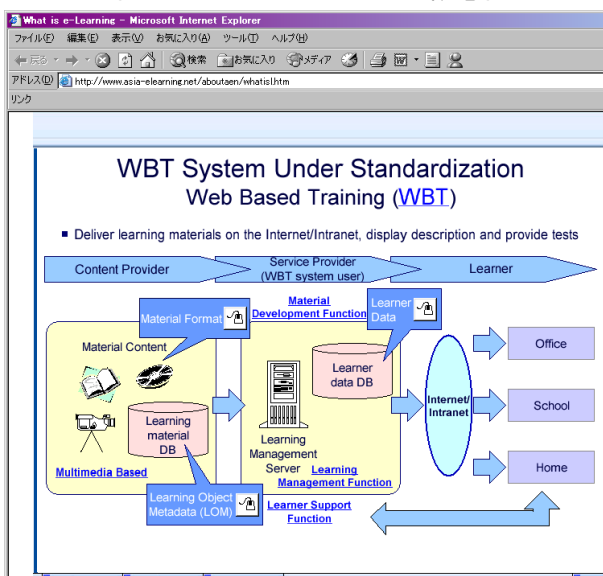
ビデオ記録を視聴するという方法で研修される意義は何か。授業をまるごと記録してそれを模倣し再現しようとしても、同じ授業は生まれない。例えば、子どもが違えば発言も違う、指導者が違えば問いかけも違う、時間や雰囲気、子ども同士や子どもと指導者の心的な関係も違う。そういう違いの中には同じものはないから、同じ授業は生まれない。だとすれば、授業研究の中で同じ授業あるいは指導過程を再現しようとするということは、あまり意味のないことだろう。林竹二は、その再現による指導法の一般化を試そうとしたが、「その疑問に対する体験的な答えが、『授業には一般性がない』ということなのであった」(10)という。

授業が一般化できない、定型化できないものであることをおさえるならば、そうであるにもかかわらず、ビデオを使って授業を記録し研修に活用する意味を改めて考えておく必要がある。

研修として大切なことは授業の流れを模倣することではなく、子どもの指導にとって授業の「ある側面」がどういう意味をもっているのかを考え、気づくことであるだろう。その気づきが子どもとのかかわりや子どもの学習の深まりを助けていく教師としての活動そのものにつながる。

吉崎静夫は、「確かに、授業には、それぞれの学級の『独自性』や、まったく同じ授業は二度とは繰り返されない『一過性』という特徴がある」一方で、「モデルや定石とよばれる『共通性』や『一

図 1-1 AEN による WBT 概念図



般性』の特徴も兼ね備えている」(11)として、「授業研究では、『個性的・個別的なもの』→『一般化可能なもの』へのレベル分けを、個々の授業実践から行うことが大切になる」と指摘している。そして授業研究のめざすものとして、「①授業改善②教師の授業力量形成③授業についての学問的研究を発展させる」(12)の3点を挙げている。つまり、記録された授業の中のある側面に表れる共通性や一般性について気づき、自分の学級での取組に反映させていくことが重要であると考えれば、その一側面を繰り返し視聴するという形式は吉崎のいう授業改善や授業力量形成につながるものといえるだろう。

ビデオカメラやビデオデッキが学校に導入されて以後、授業研究の場でもビデオ記録を利用した研修は盛んに行われている。佐藤学はビデオによって記録できるものとして「子どもと教師の身体表現、表情、語調と沈黙の意味、場と空間の様相」(14)というような、その場の雰囲気につながるものを見出している。そして、その録画を見ることの意味として「実践者が観察者の視点から授業場面を再現することを可能とし、繰り返し再現しうる利点は、複眼的、発展的な観察経験の積み重ねを可能としている」(15)と述べているが、これは教員の授業研修にとってビデオ記録のもつ意味や働きを端的に表している。

そうしたビデオ記録の持つ特質を生かした研究例のひとつに、京都教育大学で行われた「教員の授業スキルを高めるビデオ・オン・デマンド情報の実用化に関する基礎的研究」(16)がある。この研究では、「十分に長い研修時間を確保することがむずかしい教師であっても、勤務校を離れることなく校内において効率よく授業の在り方を研修・学習できる手立てを開発すること」(17)が目的で、9種のビデオ資料が収集されている。そして視聴した教員からの反応として、次のようなことが挙げられている(18)。

- ・ ビデオ資料は短時間で研修でき、忙しい現場に合っている。
- ・ イメージを湧かせやすい
- ・ テロップにより授業の視点がはっきりする
- ・ 作成者の意図がはっきりする
- ・ 1本のテープで多数の授業を見られる

しかし、一方で、テープが未編集、あるいはそれに近いものであると、視聴に長時間かかったり研修の視点が定まらないといった問題もまた生ま

れてくる。せっかくのビデオならではの利点が生かせるためには、「編集」という作業がより重要になるだろう。編集の過程を経ることで、より効果のあるビデオ記録ができるのではないかと考える。そうしたことから以下の2点に留意して編集が行われることが必要になるのではないだろうか。

- ・ 研修が短時間で行えること
- ・ 研修の視点が明らかであること

実際に教室に出かけて、授業の雰囲気を感じながら授業研究に参加することはとても重要なことではあるが、ビデオ記録がもつ特質を生かして編集を行うことで、たとえ授業に直接参加できなくても、今までより一層研修の機会が増えてくることが期待できる。もちろん、ビデオテープも授業全体のうちの1点しか画面に表示できないから、紙の上に発言記録を並べたような形で授業の全体を見通すような授業研究を行うことはできないし、記録をあちこち渡り歩くような形で見ようとしても早送りや巻き戻しで待ち時間が生まれてしまう。しかし、そういう大きな弱点も、今後はDVDビデオやビデオファイルといったメディアを用いることで、時間軸を自由に渡り歩くことができるようになり、大きく改善されるだろう。子どもの様子や学級の雰囲気をつかむという点からも、映像情報にはすぐれた点があると考えられ、これから先、ビデオを使った研修用資料というのはますます重要な意味をもつことになるのではないだろうか。

そこで、本研究では、ビデオ記録を利用した研修のためのコンテンツ開発をめざし、そのための編集の在り方やコンテンツとしてのまとめ方について考えていく。

(2) ビデオ制作 6つのキーワード

「研修」は「学問や芸芸などをみがきおさめること。現職教育。」(19)と解説されている。和英辞典ではtrainingと訳される。いっぽうtrainingは「practical education in some art, profession, etc. ex. training for teachers/a school for the training of nurses」(20)というふうに用例が示されている。また英和辞典では「訓練、教練；養成、練習；調教」(21)というふうに訳されている。

これらの例からは、「研修」というものは極めて多義であることがわかる。そこで、ビデオを視聴することの目的が自らの授業づくりのための発見を得ることであり、先にみたように「授業を再現

する」ためのものではないことから、本研究でいう「研修」とは「到達課題があってその達成度を見る形の研修」ではなく、「教員が自主的にとりくむ研修であって授業づくりのための気づきを深めたり課題を掘り下げて考えたりする」ためのものであるととらえることにする。

以上のようなことから、本研究は、つぎのようなことがらをキーワードに進めることにした。

キーワード①視聴のための視点を絞ること

ビデオ記録の中で、研修のためのテーマを明示する。

無編集のビデオ記録は時間的に長大であるばかりでなく、研修資料として考えた場合、授業を構成する要素の多さから、どの点をみればよいのか迷ってしまう場合も多い。話し合いに入れば、別の要素についてそれぞれ意見を述べ合うという形になって当然で、それらの気づきについては大切なことではあるにしろ、研修を提供する側として「どの点を重点にするか」ということを明らかにすることで、参加者としては個々の関心事を話すよりもはるかに充実できるだろう。

グループで研修する場合、視点として投げかけられていることが話し合いの柱としてあれば、どの点について話し合うのかがあらかじめ共通理解されることにより、短時間であっても一層ポイントを絞って研修を深めることができるだろう。

キーワード②「いつでもどこでも」

ビデオ記録はテープやディスクなどのメディアに記録されているものが手に入れば、再生装置さえあればいつでもどこでも研修を行うことができる。学年会のような場面でも、個人で深めたい場合でも、気軽に研修を始めることができる。

時間を調整して会場に出かける研修も大切な研修であり欠かせないものだが、日常の教材研究のような研修では、「いま欲しい」というテーマや資料が提示できることに価値があるだろう。

ビデオという形で研修資料があるだけで、時間と空間の制約をかなり小さくできる。つまり、必要なときに研修できるための手段として用意されたビデオがあれば、それを使って、時間も空間もより有効に利用できる。生の授業を見に出かけるというスタイルではなくても、それはe-Learningの概念にあてはめて考えられる。今必要であると感じたとき、今ならできると考えたとき、その必要な研修資料があることが「いつでもどこでも」という研修の形を実現する近道であると考えられる。

キーワード③授業ビデオセット

視点の定まったビデオ資料の視聴による研修をより効果的にするために、指導案、児童配布用プリント原稿、さらには研修用のワークシートなどを加えてパッケージにまとめる。このパッケージを「授業ビデオセット」と呼ぶことにする。

ビデオ資料はテープやディスクなどのメディアに記録しておくが、同時に指導計画や配布用プリントなども紙にプリントされたものだけでなく、コンピュータの上で取り出すことのできるファイルとして記録したものをセットする。指導計画もプリント類も紙にプリントしたものがまとめた形で整理されている出版物は多くあって、このプリント類に代わる形でCD-ROMに原稿を入れて添付するスタイルのものも最近は出てきた。こうすることで、かなり軽くて小さい、持ち歩くのに便利な資料セットにすることができる。

また、こうすると、提供される資料の形態も、資料の利用法も変化する。つまり、提供される資料には紙メディアのものでないため、利用者は、コンピュータの上で呼び出した電子ファイルを、そのまま閲覧したり印刷したり、自らの指導計画に合ったものに再編集して印刷するという形になる。この「再編集可能」は、資料の電子化で初めて実現する。そして、こういう形態で資料が提供されるのは、教材研究に利用できる価値がより高くなるのではないかと考えた。

このような形でビデオ資料と印刷用資料とをひとつの資料集としてまとめておけば、よりコンパクトでより効果の高い研修ができるのではないだろうか。

キーワード④「取材の視点」

研修として効果的なビデオ記録が生まれるためには、提供された素材がキーワード①で示した視聴のための視点に沿った形で用意されていなければならない。すなわち、研修にとっての授業の視点そのものを提示できるための取材の在り方が重要となる。何のためにどういう場面を撮るのか、指導者の発言記録であればいいのか、子どもの発言記録であればいいのか、それとも作業記録であればいいのか、といった点から考えて、授業を撮るといふことの意味を吟味し、そのための視点を定めていく。誰を撮ればいいのか、どのように撮ればいいのかを検討する中で、ビデオカメラの配置や数量、そして音声記録のための機材の配置や数量が決まっていく。また、場合によっては学習活動が教室でないところで行われることもあるこ

とから、取材場所に応じて準備も変化することがある。そのためには授業者との綿密な打ち合わせが必要である。

キーワード⑤「編集の観点」

キーワード①(視聴の視点)とキーワード④(取材の視点)にかかわって、重要なことがらとして、どのような編集をするのかということが挙げられる。先に述べたこれらの視点が提示できるためには、その視点に沿った形でビデオが編集されていなければならない。

子どもの(話し合い活動だけを意味するのではなく)学習が深まっていると考えられる場面を切り出す。まるごと1単元の授業記録の中では、研修のための視点として定められるものはいくつかあるだろう。その視点から場面を抜き出して、解説やテロップなどを挿入していく。また、その場面に重ねられる形のワークシートを用意しておき、視聴しながら考えをまとめたり深めたりすることができるようにする。その編集の過程を経ることで、短時間でも充実した研修ができるビデオとして仕上がるのではないかと考えている。

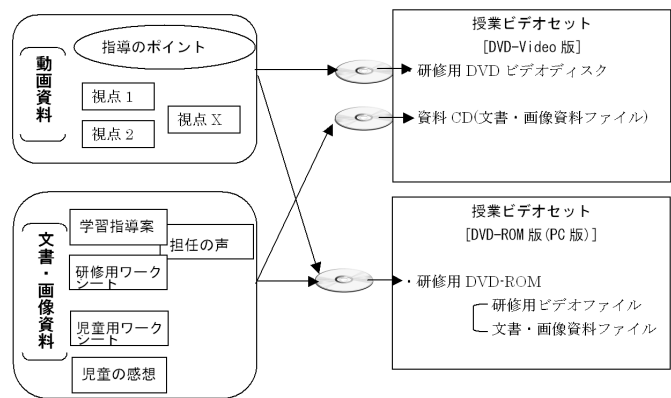
キーワード⑥「活用の方法」

ビデオを実際に収録するメディアとしてはDVD(Digital Versatile Disk)-ビデオ, CD-ROM, DVD-ROMの3つの形態を考えている。ただし、現在、小学校で使われるビデオ再生メディアはテープが主流に近く、DVDビデオを再生できないところもあることから、テープ版とディスク版の2種類を用意することも検討する。将来的にはVODのかたちで光京都ネットを通じ配信できるコンテンツにすることを視野に入れ、DVD版はビデオ版とデータROM版の同一内容2種類を制作する。これはDVDの再生環境もDVDビデオプレーヤを使う場合とコンピュータを使う場合があるからで、さらにプリントできる資料の読み出しにはコンピュータが必要になることから、メディアを複合的に組み合わせることが必要になる。

ビデオ資料に添付する資料を揃え、写真や原稿、研修用資料など必要と考えられるものをまとめてCD-ROM(DVD-ROM)の中にデジタルデータとして収録し、そのパッケージの在り方について実際に現場の先生たちに意見を聞き、よりよいものにまとめていくことを考える。

その意味ではこの研修用ソフトの開発は授業者との共同作業であった。そこで、次章より、試行

図1-2 授業ビデオセットの概念図



錯誤しながら「授業ビデオセット」を開発を進めてきた経過を報告したい。

- (1) 京都市教育委員会『平成16年度指導の重点』2004.4 p.3
- (2) 前掲 注(1) p.13
- (3) 北尾倫彦「自己教育力を育てる先生」1986 p.221
- (4) 根木屋由規「チェックポイント・学校評価 No.4」2003.11月 p.113
- (5) 前掲 注(4)
- (6) 文部科学省「2 豊かな生涯学習社会の構築に向けて」『平成15年度文部科学白書』pp.397~398
- (7) <http://www.asaie-learning.net/content/aboutEL/index.html>
- (8) 中原淳「Stanford Online のマネジメント」『eラーニング・マネジメント』2003.7 pp.9~10
- (9) 赤堀侃司「教育の情報化の現状と今後の展望」『平成16年度視聴覚教育指導者講座・講義6』2004.10.20
- (10) 林竹二・伊藤功一「授業を追求するということ」1982.5 p.154
- (11) 前掲 注(10)
- (12) 吉崎静夫「デザイナーとしての教師アクターとしての教師」金子書房1997.4 pp.132~135
- (13) 前掲 注(12)
- (14) 佐藤学「カリキュラムを見直す」『岩波講座 教育の方法3』1987.9 p.106
- (15) 前掲 注(14) p.164
- (16) 野原弘嗣他「教員の授業スキルを高めるビデオ・オン・デマンド情報の実用化に関する基礎的研究」『京都教育大学教育実践研究紀要第4号』2000.3
- (17) 前掲 注(16)
- (18) 前掲 注(16)
- (19) システムソフト電子辞典「広辞苑第4版」1996
- (20) 英英辞典研究社1986 増補 p.1214
- (21) 研究社新英和中辞典1967 p.1649

第2章 取材と編集の実際

第1節 取材の実際

(1)「授業」を撮るための視点と工夫

日々の授業で、担任からの働きかけにより、子どもの活動が動き出したり学習が深まっていったりする。私たち教員が「授業力」を身につけるといことは、おそらく子どもとのやりとりの方法を身につけたり働きかけ方を身につけたりということになるだろう。

そうすると、一つ一つの授業の中での、子どもたちへの働きかけの在り方を具体的に学ぶことや、ある働きかけが子どもたちにどんな反応や学習活動をもたらすかを学ぶことはとても大切なことであると考えられる。私たち教員にとっての、その「学び」の場というものは、ある時は講座を聴くことでもあるし、ある時は校内外の授業研究に参加することでもある。

授業研究は他人の授業を参観するというのではあるが、授業記録だけが提示されて説明もなく視点を絞られなかった場合、参加者としてはどこに論点を持って行って話していいのかわかりづらい面が往々にしてある。授業者や司会者からそういった点について説明がなかったとしたら、せっかくの授業研究も、話し合いが深まりにくい。

一方で、論点が提示されている場合には、誰もが容易にその部分にかかわって考えを深めたり話し合いにより参加したりすることができるだろう。その場で発言する・しないといった形態の問題ではなく、授業のどこを見て考えを深めるか、ということである。研修のために授業を提示することを考えた場合、そのように視点が明示されているものであれば、何について深めていくのかという目標が生まれる。

授業参観に出かけて行く場合はもとより、本研究の中で制作していくビデオ資料についても、授業研究と同じように視点が定められれば、直接参観するものではなくても、効果の高い研修資料になっていくことだろう。

では、本研究のキーワード①に示した、視聴のための視点が絞られて研修することができるようなビデオ記録を制作するためには、どのような条件が整った授業を撮影していけばいいのだろうか。また、どのような加工が必要になるのだろうか。まずは授業の条件について考えてみることにする。

実際には先に視点を定めておいて撮影できるこ

とが理想かもしれないが、授業は指導計画通り進まない場合も往々にしてある。指導計画通りに授業が進むことに気を配る必要はあるが、そうならないとしたら、計画と実際のズレについてきちんと分析・整理し、いまの学習の在り方をより子どもにとって深められるものに修正していけばよい。取材という点から言えば、その経緯の中で取材すべきものは変わっていくことになるだろう。奈須正裕は「計画カリキュラムと実施カリキュラムは別」であり「実態として確かに存在するのは授業だけ」(21)だとして、計画と実際の実践の間にはズレがあることは自然なことと認めている。このように、單元ごとに時間配当がおおまかに決まってはいるものの、計画通りに授業は進まない場合もある。そこで、撮影や担任との話し合いなどの取材活動を通じて、研修のために絞り込む視点については細かく決めていくことにした。このことは、漫然と授業するわけでも取材するわけでもない。

取材する授業を決定するにあたり、以下の2点をその条件として設定した。

- ①研修用資料として多面的に活用できるため、指導案や掲示物、児童用配布物などがよく整理され準備されている單元であること
- ②子どもが積極的に授業にかかわり考えを深めている様子がみとれる授業であること

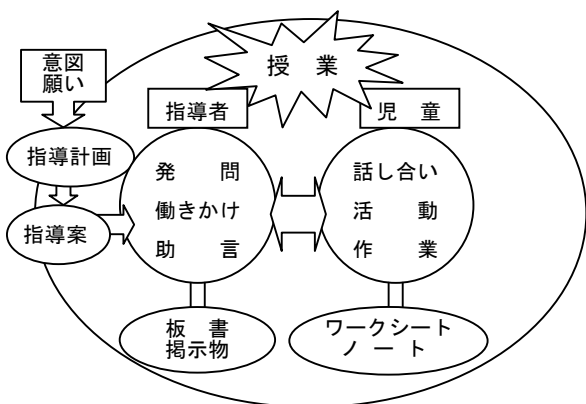
こうして条件を定め、研究協力員3人に対してその条件に見合った授業の計画を依頼し、国語・算数・社会でそれぞれ1單元を取材させていただくことにした。

上に述べた2つの条件のうち、まず、条件①に見合った資料について考えてみる。

教員用の資料と児童用の資料をセットにすることが、「よく準備されている」ことの必要条件ではないかと考える。そこで、教員用資料としては以下のようなものを考えた。すなわち、学習指導案、教室掲示用資料、具体的な提示物などである。また、児童用の資料としては、それぞれの学習中に使うプリント・ワークシートといったものを挙げられる。また、学習過程の中で生まれる児童のノートやポスターなどの記録も成果物として見ることができれば、より研修用資料としては価値が高くなるのではないかと考える。キーワード③にかかわって、それらのものをビデオとともに持ち

運びやすい形でパッケージするには、デジタル写真のような形で読み出せる工夫をすればよいことになる。

図2-1 授業を構成する要素を考える



次に条件②について考えてみる。①で述べたような、計画と資料が十分に準備された授業を実際に行う中で、子どもたちの学習活動はどのように進み深まっていくのか、どんな課題が生まれてくるのかといったことを、実際の授業記録の中で見ることができるならば、そこから学ぶことは多くあるだろう。だから今回は子どもたちが相互にかかわりあって進む授業を素材に求めた。そうしたものが研修として高い効果を生むのではないかと考えたからである。

以上の2つのことから条件としてビデオ記録を制作するにあたり、その記録のために欠かせないことはどのようなことなのだろうか。つまり、本研究のキーワード④で述べた、取材の視点である。

本研究で提示する研修内容が担任の指導法記録ではないことから、ビデオ撮影の対象は担任だけではなく、子どもの学習活動そのものを十分に含んでいる必要がある。

先にみたように、授業が一般化できない、定型化できないものであることをおさえるならば、ただ単に授業をそのまま記録することだけではあまり大きな意味がないように思える。重要なことは、おそらく授業を進めていく上で「カギ」になることがらを明らかにすることだと考えた。つまり本研究のキーワード①「研修の視点」を明示できるようにするということである。

そこで、この授業撮影では、授業の流れを「なぞる」ことではなく、流れの中から授業を成り立たせていく要素をピックアップしたいと考えた。

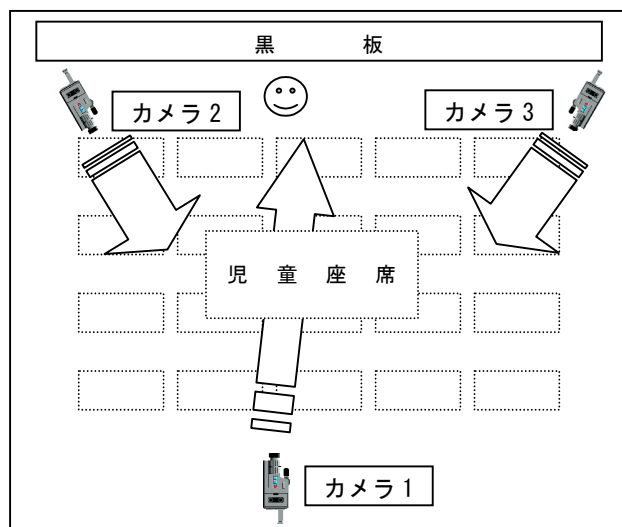
教科学習を進めていく上で、学級の「話し合える雰囲気づくり」はとても大切な要素である。例

えば

- ・意見を受け入れる雰囲気。それを形で示すための座席配置、ルール
- ・先生はナビゲータであり聞き役である。
- ・何を話したらいいのか教えてくれる。

そういった、子どもの立場から見て、学習を深めていく気持ちになれるような工夫がこらされていることが、「雰囲気」が生まれるための条件であろう。その「雰囲気」が撮りたいと思った。同時にまた、その雰囲気の中で学習を深めていくようすが見て取れる場面を提示したいと思った。

図2-2 カメラ配置を考える



視聴者にそのような提示ができるための、

- ・話し合い活動をしている子どもの表情
- ・作業をしている子どもの様子
- ・指導者の個別指導の様子

を撮るためには、子どものようすを把握できる、指導者の目に近いところから撮る必要がある。そうすると、教室の後ろに固定した1台のカメラだけで撮影することは不可能で、複数台のカメラを用意して多面的に撮影する必要が出てくる。子どもの発言や表情を撮るためのカメラは教室の前方に置き、担任の働きかけや板書、掲示などを記録するカメラは教室後方に置くというふうにして、必要な場面が取り出しやすいように多面的に同時に撮る。そういったことから、今回の研究では2~3台のビデオカメラで同時に授業を撮影することにした。

本研究では、資料化する段階で場面選びをすることになるので、撮影中にカメラ切り替えをするのではなく、編集段階でそのテープのタイムラインを揃えて適宜場面を切り出していく方法が望ましいと考えた。

また、実際、撮影中にリアルタイムでカメラ切り替えをできる設備もない中で、複数台のカメラを使って撮影をすることになるので、やはり授業後に持ち帰って編集作業の中でそのテープの時間軸を重ね合わせ、研修のために適当な場面の切り出しをするのが作業としては妥当なことになる。

さらに、録音の問題について考えてみたい。今回のビデオ記録では、映像にしかない特徴を使うという角度から見ると、たとえばテロップを使って児童の発言を示す形にすればよい。しかし、やはり音にもまた表情や雰囲気がある。だとすると、録音の方法についても工夫するところはないだろうか。その、よい記録ができるための録音について考えてみた。

家庭用のビデオカメラ内蔵マイクを使って録音した場合、教室内の反響や外来雑音がどうしても大きく入ってきてしまう。これには次のように考えられる理由が挙げられるだろう。①音量が自動調整されていて、常に最大音量で録音され、ひずみが出る時だけ利得を下げるようになっているということ、②音源(たとえば担任)からマイクへの距離が数メートルに及ぶため、周囲からの雑音とくらべて大きさの差があまりなくなってしまうこと、③音は距離と共に減衰していく性質があり、とくに高音が減衰して聞き取りにくくなってしまふこと。そういった3つの理由から考えると、このようなマイクで記録した音はあまり鮮明ではなく、研修用に提供する音としては不向きだといふべきだろう。

そこで、少しでもこういった問題が解決しやすいように、ガンマイクやワイヤレスマイクを組み合わせて記録するような工夫を考えた。ガンマイクには狭角の指向性があり、外来雑音に対していくらか有利である。横から来た音に対しての感度は、正面からのそれに比べて低くできる。とくに減衰しやすい高音を少しは改善できるはずで、これを2~3本組み合わせて子どもの発言を収録することにした。

また、子どもたちの発言や話し合いは研修のために重要なものではあるが、授業の進め役という中心的な役割が担任にあるとしたら、指導者からの働きかけやといかけはできるだけ明瞭に記録できるのが望ましい。そこで、指導者には、ワイヤレスマイクを襟元に止めておいてもらい、外来ノイズとの比を大きくできるようにして収録した。

こうして収録した音は、その場ではデジタルビデオテープやCDに記録してタイムライン上で揃えやすくする。複数のメディアに収録した音を編

集時にまとめる場合、カセットテープなどアナログ系のメディアを使って記録すると時間軸がずれてしまい、どうしても揃えることが難しい。

このような形で3~4カ所で集めた音と映像とをコンピュータ上のビデオ編集機でタイムラインに揃えて並べ、視点に沿った編集を開始することにした。しかし、こうして収録した音も、実際には現場での思わぬ雑音問題で、あまり意図したほど明瞭には記録できておらず、取材に出かけるたびに収録の難しさには頭を抱えていた。特に夏場は窓を開けると外からの音、窓を閉めるとエアコンの音がかかり入ってきてしまって、伏見住吉小の取材ではせつかくの子どもが発言が何度聞き直しても聴き取れなく、テープ起こしをするだけで膨大な時間がかかってしまった。

12月の高倉小取材では、こうした記録の仕方の改善策として、座席の間にマイクスタンドを立てて収録してみた。この方法では、子ども

写真1 後方の録音(高倉小)



との距離が縮まったこともあり、いくらか明瞭度が上がったように思う。

ところで、今回のような形で授業を記録するのは、ビデオカメラだけでも3台あることから、一人で撮影するのは不可能なことである。そこで、研究室内で研究員に依頼し、教室後方からの撮影に少しずつ時間を割いて協力してもらうことにした。

ビデオカメラで撮影される画面は教室の中のごく一部の場所の記録であり、何を撮るかは撮影者の意志に依存する。例えば同時に撮影者2人が打ち合わせなくカメラを使えば、一人はAという子を、もう一人はBという子を撮っているかもしれないが、二人とも同時に同じ子を撮っているかもしれない。撮影対象は撮影する人によって大きく変化し、撮られる内容も変わってくるのがわかる。しかも、Aは起立して話していてBは隣と相談しているというような場面が同時刻に別のカメラで撮られているのを想像してみればわかるように、撮られる内容が違えば、そこから伝えられる内容そのものが違うから視聴者が受ける印象もまた変わってくるだろう。このことからいえることは「ビデオ記録とは極めて私的な視線の記録である」ということではなからうか。佐藤学が映

図 2-3 教室後方からの撮影簡易マニュアル



像について「テープレコーダーよりも遙かに主観的な記録である」(22)ことから、映像というものは、取材者の意図を反映できる可能性に満ちた、すぐれた記録方法であるといえるのではないだろうか。

そうだとすると、やはり取材前には同行者と撮り方についての打ち合わせが必要になる。また、協力する立場からすれば、どんな学級に何をしに行くのかを伝えなくてはならない。

取材に同行してもらうにあたり、依頼を受けた側としてはなにかと不安が起きるものである。カメラの扱いや撮影そのものに慣れていないこともあるので、そういった意味で実際の撮影での作画例を元に図 2-3 のような資料を作って撮影のポイントについて打ち合わせを行った。こうすることで、少なくとも「何を撮ればいいのか」「撮るポイントに迷ったときはどうするか」が明らかになり、日常的に接触のない教室で撮ることについての不安を少なくしたり、無駄なカットの少ない記録にできるようにできたのではないと思う。

撮影依頼のポイントとしては、おおまかに次のように整理して提案した。

- ①カメラの設置場所は教室の後ろ、真ん中よりやや南寄りの位置とする。光の加減で画面が暗くなるのをできるだけ避けるために、日照に伴い

- 位置をずらす。
 - ②撮影の範囲については、指導者をずっと追いつける。
 - ③画面の切り取り方を3通りに分ける。(A)ワイド(広角)、(B)テレ(望遠)(C)机間巡視などの移動中。(A)ワイドでは黒板全景が入る程度。(B)テレでは担任の表情が見易いように、肘から上くらいのサイズ。(C)机間巡視中、顔が見えるときには寄るが、背面が見えているときは引いて広い範囲を撮るようにする。このときには前のカメラから表情を追いかける。そして、あまり細かくカメラを左右に振らず、どうするか迷ったときにはともかくワイド側に引いてもらう。
- あらかじめこういった点を心に留めておいてもらうことで、心理的な圧迫はかなり軽減できたのではないと思うし、また、実際に協力を得た研究員からは、感想として、次のような声があった。

・本格的にカメラ撮りをしたことがなかったので、カメラワークのポイントを事前に聞いて良かった。確かな技術なくして教員研修のビデオの目的に反するのではないかという感があった。

実際に今回の CD や DVD ビデオに収録しているビデオでは指導者を撮っているカメラがそれに当たるので、ぜひその点も実際にご覧になっていただけたらと思う。

(2) 取材活動の実際

ここでは、研究協力員との打ち合わせを通してキーワード④取材の視点を決めていった経過とキーワード①視聴の視点を検討してきたことを述べる。3校にお世話になって取材しているのだが、ここでは時間と紙数の関係で、最初に取材と編集が始まった伏見住吉校での取材記録を中心に記述する。

6月、挨拶のつもりでカメラを持って出かける。学級の雰囲気を見せてもらうため、約1時間撮影する。その中では国語学習に対して持っている意気込みを取材することができた。この日には、学習活動の中でハンドサインを使うことについて子どもたちがどう考えているかを記録でき、今後の研修の視点として使えるかなという感触を持つことができた。

この時点では指導者からは7月の「やまなし」を用意するという話があり、校内の授業研でも使う指導計画を作ることもあって、対象をこの単元にした。この時点での取材の視点は「子どもたちが活発に話し合いをすすめるために」であった。

写真2 7月「やまなし・12月」より



7月、1日～16日の間に7時間の授業を撮影した。情景を想像しながら「5月」と「12月」の2つの場面对比的に読み進める中で子どもたちの学習は活発であり、とてもよく発言し合っていた。授業をふりかえり研修のための視点を検討するために、このやりとりをテープから文字に起こしてみると、聞き取れた分だけでも7時間分で約30,000字に及ぶ分量があった。5月の場面と12月の場面の違いや違和感などたくさんの意見が出る話し合いになって、熱心に語り合う姿には撮影しながらファインダー越しにずいぶん心を打たれるものを感じてきた。

夏休みに入り、単元を振り返りながら指導者と話し合いの機会を持った。その中では、さらに次の単元でも撮ってみてはどうだろうかという方向が出てきた。それは以下のような理由による。

「やまなし」の学習では、子どもたちは実にたくさん話し合ってきた。一方で、子どもたちの「読みの多様性」という点からみれば、これだけ話ができる子どもたちであればもっと深く広がるのではないかと感じられるという課題が出てきた。それは、例えば、5月12月の場面の読み比べの中で、多くの子が活発に話し合った一方で、「トブン」と落ちてきたやまなしへの見方がひとつの方向に収束してしまう傾向を感じたからであった。

それならば、「読みを深める」ための読み物教材は9月に「海の命」がある。「やまなし」に引き続き、さらに深く多様な「読み」を求めていく取組を撮影してみてもどうだろうか話し合った。

そのような経過から、子どもたちの「読み」を深めるための新たな工夫をこらし、9月にも撮影を続けて、その工夫によって子どもたちはどう変わっていくことができるか見てみようということになった。

授業の進め方について、子どもが個々の課題を追求できる形を考えた結果、指導者はこの学級はじめての試みとして「共通話題」「学習課題」とい

うアプローチを使ってみることにされた。そして、この方法が第1時に子どもたちに提示されることになる。ここで取材の視点は「子どもの『読み』を深める」に変わった。

夏休みが終わり、まだ暑い中で授業が再開する。「海の命」の指導計画は7時間扱いで、以下のようなものであった。

- 1～2時 教材文を読み、登場人物の生き方や考え方について読み深められるように学習課題をつくる。
 - ・主題を考える手がかりとなることばを見付け、おもいをもつ。
 - ・登場人物の生き方や考え方について読み深めるための視点をもつ。
- 3～5時 自分の立てた学習計画に沿って登場人物の生き方や考え方を読み取り、伝え合うことにより考えを深める。
- 6～7時 「命」についての考えを、作者立松和平の考え方と比べながら書く。

このうち3・4・5時間目が共通話題を柱に据えた話し合いの時間になった。子ども一人ひとりもっている学習課題解決のための共通の足がかりとしての「共通話題」を軸にしてみたとき、子どもの「読み」はどのように深まっていくことが可能なのかを取材することにした。

授業の実際は次のようであった。

第1～2時の「共通話題の設定」の中では、子どもたちが個々の学習課題を発表しあう中で、その課題に共通していて、お互いの課題解決のための橋渡しができそうな話題を考え合う。

この日は2つの共通話題が生まれた。

- ①太一はなぜ海に惹かれるのか。
- ②大魚は海の命だと思えた、とはどういう意味か。

そして、「ほかにもいい話題があるから、行き詰まったときにまた考えよう」ということで、この2つを「共通話題」として今後の学習の中で話し合っていくことが決まる。

第3時、いよいよ共通話題についての学習が始まる。この日は①「太一はなぜ海に惹かれるのか」について話す。ここが「共通話題」を使った学習の初めての出発点であったせいか、まだ自分の学習課題との区別や関係がよく整理できていない子どもたちもいた。そこで、指導者は立ち止まり、この日の話題についてゆっくり確かめさせる。しばらくこうすることで、共通話題として前時に押

写真3 「海の命」の話し合いから



さえていたことが確認でき、「同じです」という声
が自然に上がってきて、子どもたちはスタートラ
インを揃えて話し合いに入っていくことができ
た。

第4時には共通話題②『『大魚はこの海の命と思
えた』とは?』についての話し合いが行われた。こ
の日には少しとまどいもみられるが、「かけがえの
ないもの」を軸に、「命」とはなんだろうという話
し合いが深まった。

そして第5時には新たに生まれた共通話題③
「太一の生き方を考えよう」について話し合わ
れる。父をなくした海で、父と渡り合ったかもし
れない大魚に出会った太一は、もりを打たないとい
う選択をした。その太一について、「自分ならどう
するだろうか」とか、「太一をどう思う」とか、「太
一はどんな気持ちだったのだろうか」とか、ずいぶ
ん多様な、それぞれの「読み」の交流がなされる
日になった。

そして、この日の話し合いの取材中に、ハンド
サインを出すより先に起立して発言を求める姿が
頻繁にみられることに気がついた。このことは、
授業を構成する要素としてハンドサインが子ども
の中でどう変容しているかを示しているのではな
いだろうか。そこで、取材の視点として[ハンド
サインの効果]を加えることにした。

また、このような取材活動の中から、さらに成
果物の構想がふくらんでいった。授業そのものの
撮影と研修用教材化だけでなく、**キーワード③**
にかかわって、授業を成立させる要素や子どもた
ちのノートなどについても記録し、まとめておきた
いと思った。その方法については次節で述べる。

授業取材の過程では、いつも授業がうまくい
ったというわけではない。9月という時期は、まだ
ずいぶん暑い。そして運動会を目前に控えていて、
応援団の練習が終わった休み時間の直後であつたり
組体操の練習をした体育の時間の直後であつたり
と、あまり落ち着かなかつたり疲労感が残って

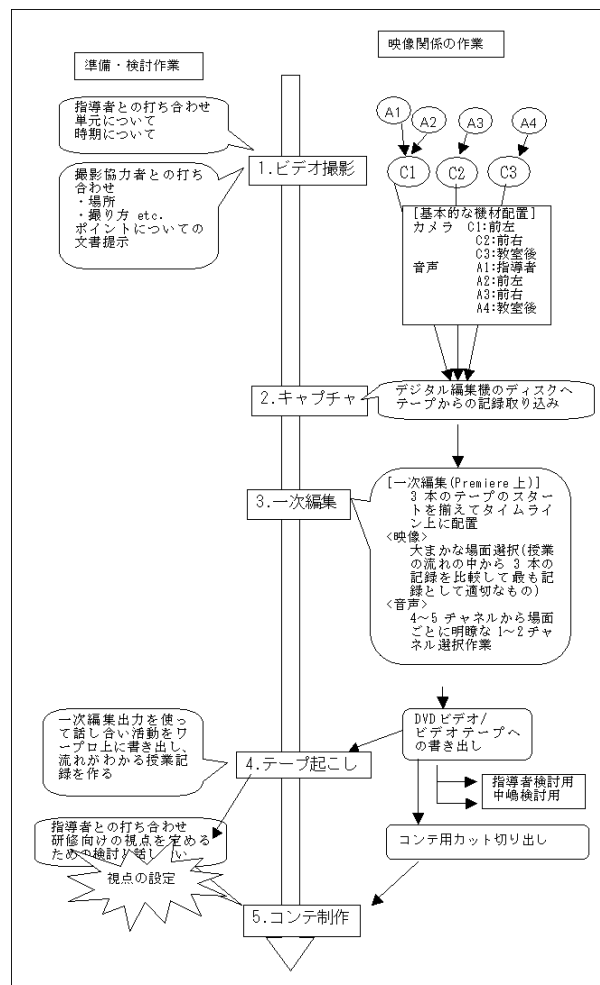
いたりする日もあったというのが本当のところ
である。したがって、一日の授業の中でも当然のこ
とながら起伏はあり、話し合いに盛り上がりがあ
らぬと感じるときもあった。しかし、それでも、
指導者からの投げかけに子どもたちは反応しよう
としていたし、他の子どもの発言を聞いては自分
の考えを述べようともして、授業への参加の意欲
を感じさせられ続けていた。

第2節 編集の方向

(1) 研修の目的に沿ったビデオの切り出し

第1章で述べたように、本研究で制作するビ
デオ資料では、視点をはっきりと提示する。そうす
ることで初めて、視聴者にとっては「何を見るか」
「何を考えるか」を意識しながら資料に接するこ
とができ、短時間で効果の高い研修を実現でき
ることになると考えている。そのような資料を作
っていくにあたって、研修のための視点をいくつ
かに絞り、その観点に沿って、ビデオの切り出し
の方法と全体構成の方法を考えていく。

図2-4 視点が定まるまでの流れ



はじめに、取材前の打ち合わせからビデオ資料の編集のための視点が定まるまでの流れについて述べる。

今年度、3名の研究協力員に授業提供をしていただくことになっているが、提供していただくことがらについては以下のようなものをお願いした。

- ・1単元すべての授業を撮影させていただくこと。
- ・単元の指導計画を作ってください。これは添付資料として収録したい。
- ・児童用の配布物の原稿。ワープロ打ちしてあるファイルの場合は、できれば電子ファイルのまま。
- ・その他単元の指導に関係のある資料。掲示物の場合は写真など。

そのような条件に見合うことのできる授業を準備していただいて、その授業の時期が来たら撮影を始める。

今回の撮影は、研修用ビデオとしてまとめていくことが目的であるので、授業撮影とはいっても子どもの姿を撮りたい。さらに次のようなことについて了解をお願いした。

- ビデオカメラは複数台を用意して、指導者を撮るだけでなく、子どもたちの顔が見える角度にも設置する。研修用の資料制作とはいえ、この点について保護者からの了解を得ておいていただきたい。

そうして授業を中心に取材活動を行い、記録テープを一次編集(後述)してビデオテープまたはDVDビデオなどに出力し、指導者に届ける。指導者にはそれを視聴しておいてもらい、研修として提供できそうなことがらについて後日検討しあう。ここでテープ起こしもしておく。その検討を元にコンテを作り、その後資料としての編集作業(=二次編集、後述)に入る。

次に、この段階での編集作業について述べる。編集作業はすべてコンピュータ上で行う。3台のDV(Digital Video)カメラで取材してきたテープをそのままハードディスク上にビデオファイルとしてキャプチャ(取り込み)し、編集可能な状態にする。キャプチャしたファイルは、授業をその前後を含めてまるごと撮影した未編集の記録がそのままコピーされた状態なので、そのまま視聴するには無駄が多い。そこで、先に述べたような視点にふさわしいと考えられる部分だけを選んで切りつめ、研修にとって意味のある部分として別のファイルを作り、新たに残していく。そして、いくつかの切りつめて小さくまとめてできあがった

図2-5 コンテの例

国語「子どもの読みを深める」コンテ(案)	概 略	注
0000	【タイトル画面】 (1)子どもたちの「いい顔」のカットつなぎ	数カット静止画
0015	小学校国語研修用ビデオセット(1) 物語文の「読み」を深めるために 学習課題と共通話題 ～8年生・国語「海の命」を通して～	一児童委員の 課題部分 背景
0030	【研習課題提示1】 テーマ1「授業で物語文を扱うとき、子どもたちが深く読み取れるようにするために、どんなことをしておられますか。あるいは、どう思われますか。」 いま、あなたが授業をするにあたって、「読みを深めるための悩みや課題はどんなことですか。」 「ビデオを止め、この2点について考えてみましょう。」	*備への思い 緑のりの場(01 発言「みんなに ・寝きなかった ったいどう思っ りに読み?
0100	【研習課題提示1】 テーマ1「授業で物語文を扱うとき、子どもたちが深く読み取れるようにするために、どんなことをしておられますか。あるいは、どう思われますか。」 いま、あなたが授業をするにあたって、「読みを深めるための悩みや課題はどんなことですか。」 「ビデオを止め、この2点について考えてみましょう。」	*ロール・語り/

(切り出された)ファイルは、研修の目的に沿ってさらに再編集の過程に通すことになる。

例えば、前節で述べたように、国語の授業では「学習課題と共通話題」というアプローチを使って子どもの読みを深めるための取組を進めている。そこで、このアプローチがどのように子どもに受け止められ、「読みを深める」ために使うことができるのかという点からみて意味があると思われる部分を残していく、このような作業をここでは「切り出し」と呼ぶことにする。

この切り出し作業をしながら、併せてコンテを描く作業にも入る。デジタル編集であり、どんどん作品の姿が柔軟に変わっていくことから、コンテそのものはかなり大雑把なものではあるが、編集方針を反映させていくためには、この作業も必要なものになるだろう。

伏見住吉小での「共通話題・学習課題」についての話し合いは9月4日～15日の間に行われている。このうち4日の第1～2時は「共通話題」を決めるための話し合いで、今後の学習の入り口を作る作業であった。したがって、この話し合いの様子を提示することは必要だと考えられる。

そして4回に渡って共通話題を使った話し合いが行われている(計画は3回だが実際は2つめの共通話題で2日に渡っている)が、この中から、取材の視点に沿って「話し合いの記録が比較的しっかりとれていて、なおかつ、話し合いの内容が深まっていく様子の見て取れるもの」を選び切り出すことにして、何度か検討を重ねる中で、3つの共通話題についてそれぞれ1時間分ずつ資料化していくことにした。

もう一つの取材の視点である、「ハンドサインの利用」については、7月「やまなし」と9月「海の命」での利用場面を切り出して示すことにした。2つの単元に渡って切り出すことにしたのは、以下のような理由による。

- ・2つの単元でのハンドサインの示され方がどう変わっているかに気づくことができる。
- ・「海の命」の話し合いが深まる中で、ハンドサインが後回しになる場面が出てくる。ハンドサインより先に発言が出てきて、話し合いが活発になり入り組んでいることをどのように見るかという点で研修課題になる。

ハンドサインに関しては6月と12月にも子どもの気持ちを取材していて、子どもたちがどう受け止めたり使ったりしていたかを調べるのに使ってみたい。その子どもたちの気持ちと授業の中での使われ方を対比してみたとき、また気づくことができるのではないだろうか。

話し合い活動の中で、ハンドサインが現れるのは発言の直後である。そこで、研修用に提示するために、同一場面でハンドサインの部分まであるものとないものに分けて切り出してみたとき、ハンドサインの持つ意味について考えられるかもしれないと思った。

ハンドサインの使われ方は9月になってやや変わったように感じられた。特徴的なことは、7月の「やまなし」での取材の頃と比べて、「サインに幅が出てきた」というようなことであった。7月の段階では、発言をうけて出すサインは「気がついた」とか「同じです」というような単一のものが多く、「・・・と同じで」という前置きのある発言が何度か続く。指導者の助言によって話題や発言は推移するが、類似の発言である場合が多かった。ところが、9月の取材の時には、サインの出方は同時に幾通りにもなってきたし、発言そのものも誰かへの同意や補足という形ではなく、自分の考えとして出されるものに変化しつつあった。

特に変化したように思われるのは、3つめの共通話題を話し合っていた日だった。発言をうけてハンドサインが上がり、そのサインを見て次の発言者が指名されるのだが、この日の後半は、発言が終わるとハンドサインが出ると同時に次の発言が飛び出したりすることもあった。そのような状況と「読み」の学習の深まりとの間には関係があるように感じられた。

ここから気付いたことは、ハンドサインは、子どもたちを授業に参加させるという生活指導的意味で手段として使われてきているということである。授業に参加することそのものに子どもたちが意欲をもっているならば、その利用にはあまり重点を置かなくてもよいのではないかと、いうことであった。

(2) ビデオセットの構成

前節で述べたとおり、「読み」という角度から授業を眺めてみたときに、その深まりとそれを支えるための指導者の工夫を取材の過程では見て取ることができた。こういった点を研修のための視点として提供できるようにするためのビデオ編集について、ここでは考える。また、研修用の資料として、核としてのビデオ資料に加えて、さらにどのようなものを付加していけば使いやすく効果の高いものになっていくのかといったことについても考えていく。

「読み」を深めるための授業の工夫=指導者の授業力は、今回の取材の中では「共通話題」「ハンドサイン」といった形で視点として設定した。そこで、これをビデオ表現で示すことができるためには、次のようなビデオ加工上の工夫を考えた。

- ・テーマ別にビデオを切り出すこと。教室で使われている特徴的なことから、話し合われている中身への理解の仕方が明示できるためには、その方法を知ることが必要ではないか。
- ・切り出した資料の必要な場所にテロップやロールなど映像を補完できる資料を差し込むこと。子どもの発言が不明瞭であったり、どんな内容で話されているのかテーマが不明確であったりしないようにする。
- ・映像を解説したり問題提起したりするのに必要なナレーションを入れること。
- ・指導者や子どもの声を入れること。

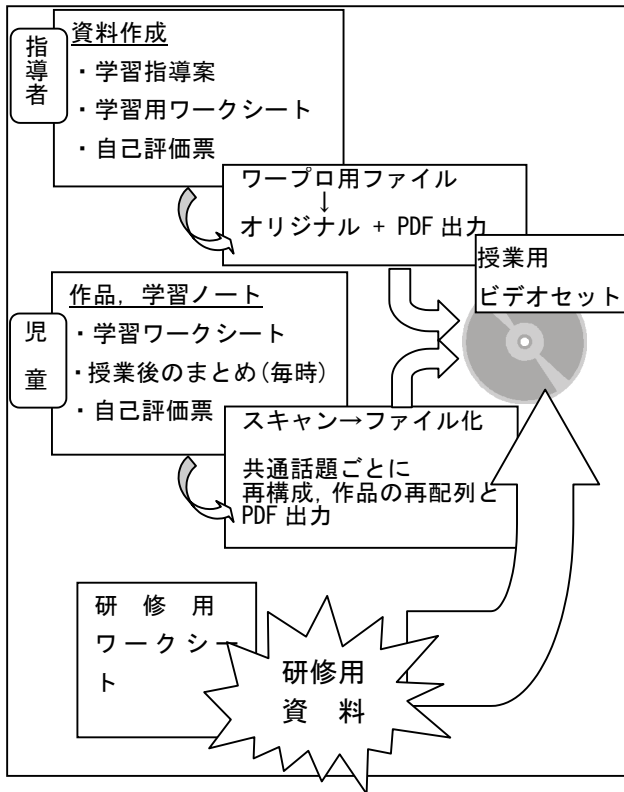
さらに、この資料の**全体構成**を考えてみた。より効果的に研修を進められる、充実した資料とするためには、ビデオ記録に加えてどのようなものを組み合わせ添付したらよいのかを考えた。すなわち、第1節で述べたような「よく準備された授業」での記録としての資料であることから、授業そのものばかりでなく、その準備物や子どもの学習記録もまたビデオ資料とセットにして提示するということである。そして、大切な点がもう一つある。

・研修ができるための工夫を組み込む

ということである。今回のビデオセット制作では「いつでもどこでも」を一つのキーワードとしているが、このためには、一人でもビデオを見ながら研修が進められるように組み立てられていることが必要になる。

では、どんな工夫をすればよいのだろうか。

図2-6 学習指導用添付資料の構成を考える



動画資料に添付する指導用資料は授業のために必要なものである。私たち教員が「授業力」を高めるために必要なことは、動画資料からどんなことを学ぶことができるかという点にある。したがって、漫然と視聴するのではなく、動画を視聴しながら研修が進められるための仕組みとして、動画内にはナレーションや解説テロップを入れるが、それと平行して記入しながら研修を進めることのできる、研修用のワークシートが用意されていることが必要ではないかと考えた。

キーワード⑥で述べたように、このビデオセットの活用方法の一つには「授業の資料を取り出すことができる」ということがある。ビデオ資料に加えて、指導案やワークシートなどを利用者が自由に取り出すことができるための仕掛けが必要で、印刷物または電子ファイルの形で提供されれば実現できる。ビデオデッキとテレビの組み合わせでは視聴するという形だけだが、それに加えてなんらかの形で手元に取り出すことのできる資料があればよい。オンラインでブラウザから呼び出せばすべてが揃うようにするという点から考えても、ビデオ以外の資料は電子ファイル化しておくのが妥当だろう。そして、これらの資料は、用向きによって閲覧するだけのものもあれば書き足したりして授業に利用するものもあるから、その用向きに合わせてディスクへの収録形式を考えれば

よい。

動画コンテンツについては DVD ビデオ版と CD-ROM (DVD-ROM) 版を作ることを述べた。CD-ROM (DVD-ROM) 版ではビデオ資料が目次に沿って並列に構成できるので、概念的に VOD として使うことができる。そしてビデオファイルとして作られたものになるので、オンラインで呼び出して利用可能な形式でもある。今回、ビデオファイルのフォーマット(記録形式)は、汎用性という点から見て mpeg1 形式を使うことにした。すなわち、今日ネットワーク上で利用するのに適したものとしては wmv 形式や mpeg1 形式、real 形式といったいくつかの形式が存在するが、様々なプラットフォームを超えて共通に読み出しやすいファイル形式であることが望ましい。学校で使われているコンピュータがほぼ windows 機である点からいえば画質面でやや優る(見やすい)wmv が良いようにも思う。けれども、家庭や他府県での読み出し(利用)も視野に入れて考えるならば、windows 以外のプラットフォームでも特に支障なく使える形式である方がいいだろうと判断した。以上のようにして研修のためにビデオセットの構成を考え、制作したファイルからブラウザ上で読み出せるコンテンツを制作し、CD-ROM (DVD-ROM) 版のビデオセットにまとめていくことにした。

ビデオ版のコンテンツは、ビデオテープでなく DVD ビデオ版として仕上げる。これも CD-ROM (DVD-ROM) 版と同様にビデオを VOD 的に利用することを考えている。ビデオテープを再生する場合、テープ上に記録されたコンテンツは、タイムライン上の 1 点を再生する形になるので、巻き戻しや早送りのための待ち時間が問題になる。再生したいポイントが時間的に離れていればいるほど、この待ち時間は大きくなるが、DVD ビデオも CD-ROM (DVD-ROM) 版同様に、待ち時間が圧倒的に短縮できるという利点がある。そうして映像記録を DVD ビデオや VOD という形で視聴できる環境があるならば、比較的ロス時間を少なくして研修が進められるだろう。また、必要な場面がテーマごとに切り分けて整理されていて、目的の場面を手軽に得ることができる。このときにデジタル記録の持つ特性が生きてくると考える。このような点から、研修に使うにはビデオテープより DVD ビデオの方がふさわしいのではないかと考えている。

(22) 奈須正裕 「総合学習を指導できる”教師の力量”」 1999.4 pp.130~132

(23) 佐藤学 「授業研究入門」1996.4 p.125

第3章 より充実した研修のために

第1節 効果ある研修ソフトを求めて

(1) 研修視点の明確化=一次編集から二次編集へ

ビデオセットの中核をなすビデオ資料の制作(編集作業)は、おおまかに分けると3回に区別することができる。取材から検討までの一次編集、視点に沿って順序を入れ替えたり解説を入れたりしながら資料として仕上げる二次編集、そして再検討による三次編集という流れは、以下のようになる。

一次編集

かなり粗い、大まかな編集をする。編集作業の前段階のような作業。

- ・テープから取り込んだ3本のファイルのタイムラインを揃えて1本にまとめ、3本のうちの1本から適切な場面を選んでおく。
- ・音声は3~5トラック程度あるので、雑音が大きいようなものをある程度消して聞き取りやすい形にしておく。
- ・二次編集のため音声のテープ起こしをしておく。
- ・ビデオテープやDVDビデオディスクに書き出し、指導者に届ける。

二次編集

- ・視点に基づきビデオの切り出し、視点に合う場面選択。
- ・テロップ/ロール入れ、音声の整理
- ・場面に合った解説のためのナレーションやテロップの制作。
- ・飾り部分(オープニング/エンディングなど)制作
- ・指導資料(指導案、配布プリント等)の電子化(PDF出力)。
- ・児童の学習記録や作品の電子化(スキャン→PDF出力)。
- ・指導者に届ける。

三次編集

- ・二次編集のビデオを検討する中で問題になった部分を手直ししたり、指導者と添付資料について打ち合わせや確認をする。
- ・公開できるビデオセットに仕上げる。

このような形でビデオ制作と資料制作を並行して進めていく。

ここで、伏見住吉小学校での取材から、実際の編集経過について報告する。

① 3本のマスターを一本化する

今回のビデオ編集作業をするにあたり、編集用のソフトウェアにPremiereを使った。このソフトウェアでは多くのビデオ(映像)/オーディオ(音声)トラックを並べて切り替えたり入れ替えたりが柔軟にできる。また、

この種の編集ソフトウェアの中では編集作業中に処理が遅くなることが比較的少ないように思うので、大規模な編集でもストレスが少ない。さらに、1コマ(=1/30秒)単位で編集をする仕組みがあることから、トラック間の時間的なずれを1/60秒までに収められ、1つのシーン内でのトラック切り替えや混合作業をしても違和感が少ない(特に音がずれるとエコーのような感じが出て、聞き取りづらくなる)。

一次編集の最初の作業としては、ビデオをファイルとしてハードディスクに取り込む(キャプチャ)作業がある。これにはDV STORMを使用した。撮影から帰ると、1本のマスターテープから取り込んでおく。これには実際の撮影時間と同じ時間が必要で、1本ずつ作業するため、45分の授業を撮ってくれば3倍の135分かかる。ただし、特に細かな編集作業はない。

キャプチャが終了したファイルを重ね合わせる粗編集に入る。場面の切り貼りを進めていくファイルをプロジェクトファイルと呼ぶが、それぞれの授業ごとに作るプロジェクトファイルにある3本のビデオトラック上に並んだ

ファイルはスタート時刻が少しずつ違うことから時間軸がずれていて、始まりが異なっているので、このまま重ね合わせると同じ音が後から追いかけてきて

図3-1 ビデオを取り込む



図3-2 ストロボの合図



しまうことになったり、同じ場面を違う角度から撮影した場面が出てきてしまうことになる。そうならないために、スタート時点が異なる記録も、映像でも音声でもよいので、何か特徴のあるカットを入れておき、それを目印にして、トラック上で時間軸を揃えてやればよい。今回の一連の取材では、編集作業の効率化のために、カメラに向かってストロボを発光させ、3台ともにそれを記録しておいて目印に使うことにした。ストロボは光量が豊かで明るい割に発光時間が極端に短く、1秒間に30コマの撮影をしているビデオでも発光が記録されているのは1~2コマであるため、時間軸を揃えるための目印としてとても使いやすい。ビデオトラックとオーディオトラックは、このトラック配置の時点でリンクを切り離しておくのがよいのだが、編集作業がしばらく進んでからこのことを思い出してしまうことも多く、時間のロスを生む一つの原因になった。

映像記録はビデオ部とオーディオ部の2つのトラックから成り立っていて、この2つのトラックは時間的に同期している。この同期を外す(リンクを切る)作業を先にしておくと、オーディオ部だけをビデオ部と別に編集する作業の手順がかなり減ってくる。リンクがあるままだと、これから先のカット編集の中でビデオとオーディオの両方のトラックに対して同時にカットが入ることになる。こうなると、不要になったオーディオトラックを削除したり、逆に必要な範囲の音量を加減したりするような編集場面で、細切れになったひとつひとつのオーディオトラックを加工する必要があるが出てきて、かなり手間取ることになってしまった。しばらく編集が進み、不要な場面を切りつめる作業をしていってからこういうことに気がつくともうはじめから編集のやり直しをするのもかえって時間がかかってしまう。それで、効率が落ちてそのまま続けるを得なかった。

こうして3本のマスターテープを1本にまとめ、おおまかな場面選びを済ませたところで一次編集が終わり、授業の一部始終が記録されたファイルができあがる。ここでひとま

図3-3 トラック内のリンク切り忘れによる分断



ずDVDビデオやビデオテープに書き出しの作業をして指導者に届け、研修のための視点や撮影の在り方について検討しておいてもらう。そして、研究室ではテープ起こしの作業を始めて、視点を絞った編集のための準備をする。60分の話し合い記録が多く、分量があるのと雑音が多いのとで時間がかかり、7月の「やまなし」記録7回分のテープ起こしをほぼ終えたのは9月末だった。

前章第1節(2)で述べたように、子どもの「読み」は、その「深まり」という点からみてもっと多様になるのではないかという新たな課題が出てきた。そこから9月の「海の命」をさらに取材することが決まる。そして同じようにテープ起こしをしながら指導者と研修のための視点について話し合い、「共通話題と学習課題」を使った話し合い活動を中心にしていくことを確認した。

こうして、2つの視点から二次編集の作業に入っていく。この段階では、視点に沿って映像ファイルを切り出す作業が続くことになる。

②視点に沿った切り出し

[視点1 共通話題と学習課題に沿った切り出し]

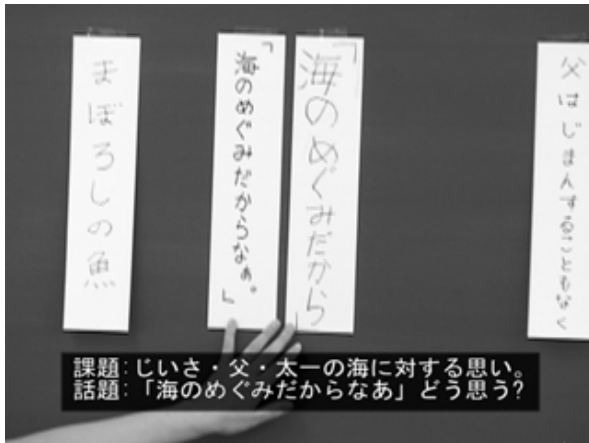
前節(2)の中でふれたように、子どもの「読み」を深めていくための手だてとして、『共通話題と学習課題』という発想が生まれた。子どもそれぞれの「学習課題」をもたせ、課題は少しずつ違うものの、それを貫きそうな話題を話し合う中で個人の課題解決と「海の命」というテーマに同時に迫っていく取組が始まった。

「きょうのめあて。ひとりひとりに学習課題もってもらっている、それを解決するために、海の命の主題を考えていかなんどのやね。その主題は何か、を、考えるために、まず、必要な言葉。『このことばからこういうことを考えてくれたらうれしいな』という共通話題、について今日は考

写真4 共通話題を作るための話し合い



写真5 課題から話題を検討しあう



えてもらおうと思います」という導入に、子どもたちは課題解決への期待をもっていったようだった。導入に当たるこの日の授業では、共通話題というものを充分理解させることが大事なことである。自分の学習課題の解決のためにみんなで話し合う話題を使う、ということを引き出すために、指導者の投げかけた言葉は子どもに届いたようにみえた。そのカットを使ってこの日の学習を示したいと思った。

子どもは自分の学習課題をそれぞれ用意していて、ひとつずつカードに書きこんでいた。それを持って自分の課題を発表するのだが、残念ながら授業公開の日でもあり、子どもの発言があまり鮮明に記録できなかつたところがたくさんあって、テープ起こしは不完全にしかできなかった。

「学習課題は、なぜ太一はお父さんが死んだ海へ?ってことで、海のどんな表情も太一は好きだった、っていうことで、太一はすごく海が好きだということがわかるから。みんなに考えてもらいたいことは、太一は海のどんなところが好きなのか、ってこと」

「与吉じいさと父の海に対する思いと、太一の海に対する思いの違いを調べるのが課題。そのため『海のめぐみだからなあ』というのが大切だなあと思った。みんなで考えてほしいことは『海のめぐみだからなあ』というのを聞いてみんなはどういうふうに思うのか」

「なぜ太一は海に惹かれているのかを追求したい。そのためには、『おとうといっしょに海に出るんだ』という言葉が大切だと思った。なぜ太一は父が死んでも気持ちが変わらなかったのかと思う」

といった発言から、「太一はなぜ海に惹かれるのか」という共通話題が生まれた。もうひとつ「大魚は海の命とはどういう意味か」という共通話題

が生まれているが、この共通話題2つが生まれてくる経過を切り出すことで、子どもたちが自分の学習課題解決への意欲を持っていったことを示すことができるだろうと思った。

[共通話題についての話し合い場面 1]

初めて共通話題を使った話し合いに入る。初めてということがあってだろう、自分の学習課題と共通話題として設定したものの区別がつきにくい発言がしばらく続く。充分そこで子どもたちから出させておいた上で、立ち止まり「そうやったっけ」と問い返している。

いきなり「今日の共通話題はこれこれで」と提示するようなことをしないで、子どもたちから言葉を引き出して考えさせるという方法にはどういう意味があるのだろうか。この立ち止まりにはかなり大事なことなのではないかと考えた。つまり、この日の学習としては共通話題についての話し合いそのものなのだが、それが始まるまでのこの時間は、子どもたちに学習内容を主体的に確認させるという意味で重要に思える。しかし、一面では「そうやったっけ?」という投げかけは「正解ではない」という、子どもにとって「切り捨てられる」ことを意味するものであるかもしれない。指導者の表情が子どもとの関係を左右する気がして、その表情は編集として欠かせないと思った。このような投げかけの在り方については、「どうして先生はここにこだわるのだろうか」というような解説またはテロップが必要だと考える。また、「共通話題」「学習課題」の関係についても理解を促すための図を用意する。

この時には、「言ってくれた『海の命とは何か』、大きな主題やね、それを解決するためにみんなそれぞれの学習課題を決めた。で、いまみんな別々、

写真6 共通話題を確認する



写真7 海に父がいる!?



バラバラやんな。この6の2の教室で、ひとつの話題、この1時間にひとつの話題、みんなで話しあうんやな。なんやった? 」と振り返らせることで、前時をよく想起させる。

こうしてこの日の話題「太一はなぜ海に惹かれるのか」について話し合う。「話題」と「課題」の違いを押さえ直して「話題」についての話し合いに入る。

子どもの発表をいくつか振り返ってみよう。

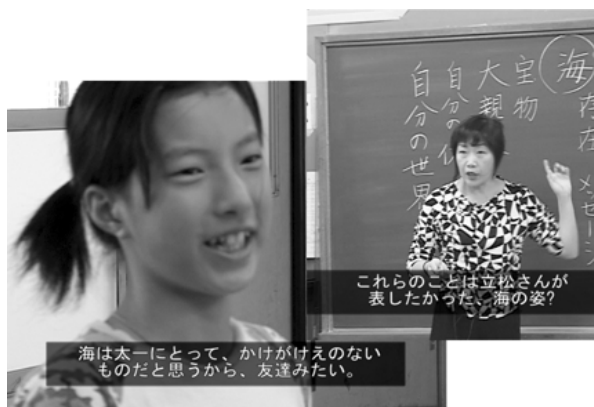
「小さいころから海が好きで、おとうがすごいめぐり漁師だったから、太一は海に惹かれていたのかなあと思いました」

「父の死んだ海は、太一にとっては友達のような存在だったんじゃないか」

というふうに、父との関わりで太一の気持ちをさぐっている。また、『おとう、ここにおられたのですか』とかいてある」ことに気づく子がいる。

そして、「お父さんがいると思って帰ってきたのかな」という言葉を指導者はとらえて、「海に父がいる」と板書した。そして「おもしろいこと言うんやね。海に父がいる。こういうふうに思う、っ

写真8 「かけがえのないもの」



ていう人、ちょっと確認。海に父が海に父がいる、っていうふうにとらえている、っていう人? 」と問いかけてみると、かなり多くの子が挙手した。この場面をとりあげることで、共通話題への子どもたちのかかわりが見て取れると思う。

【共通話題についての話し合い場面 2】

「大魚は海の命、とはどういうことか」という共通話題では、「海の命」を子どもがどうとらえているかについての話し合いが続く。この中では、「命」という抽象的なものについて「かけがえのないもの」という言葉に着目した発言が続く。

「海は太一にとって、かけがえのないものだと思うから、友達みたい」

「海は太一にとってかけがえのないもの、っていわはったけど、ぼくもそう思って、魚も友達や」

「太一にとっては海というのは大親友」

「太一にとっては海はなんか自分の体みたい」といった発言が続いている。「とても大切なもの、たとえば友達であったり宝物であったりという表現から「かけがえのないもの」、ということばへの理解が見て取れるだろう。

同時に「命=魚、生きもの」というような理解があることが明らかになってきて、確かめてみるとかなり多くの子が「そう思っていた」という。そこで指導者は「命、ってなんなの」といって問いかえす。「ちょっと聞かしてほしいんやけど、自分の命、っていうたら、自分の生き物、ってことなのか?ごめん、変なこと言うてるやろ。命のとらえ方がな、わからへんね。」というふうに、『命』のとらえ方にこだわる。恐らくそれはこの作品のテ

写真9 『命』ってなんだろう



写真 10 授業終了時の感想



一まそのものにかかわるからだろう。「詳しく教えて。生き物、ってとらえるということ。自分の命、っていわへんか?動物の命、っていわへんか?動物の生き物、か?自分の生き物、か?なんとなく、わかんね。生きものというふうにとらえた、っていうの。」というふうに、子どもの考えを受け止めながら、主題に近づいていかせようとする姿勢が見えてくる。

こうして、改めて「ひとつしかないもの、かけがえのないもの」という反応をきっかけにして「命」への理解が深まっていく。そして、この授業の印象として「命」ということばが「すごく残った」という感想につながる。このような形で深まっていく様子を切り出して行こうと思った。それは、「共通話題」を使うという方法をどうみるかという問題ではなく、子どもとのかかわりの中で発言を受け止めながら主題に近づいていこうとする姿が見えてくるということだと思ふ。

【共通話題についての話し合い場面 3】

こうして進んできた2つの共通話題を使った話し合いの中で、新たな話題が生まれている。この日は、話し合いがずいぶん深まる日になった。「太一の生き方を考えよう」が、この日の共通話題として話し合われることになった。

太一が「クエを殺さなかった」ことについて、自分ならどうしていたかという話し合いの中では、「自分なら殺していただろう」という意見がほとんどだった。ここでは「同じ」という反応が多かったのだが、もりを打たなかったことについて太一の気持ちに寄り添おうとする意見も出てくる。そこには「クエと父が重なって見えた」「クエは父じゃないけど父のようにみえる」というように、似てはい

るが少し違う考えがあり、また「いつやられるかわからないからもぐらない」というものもあった。「父とか与吉じいさは漁師やから海で生きて、海へ帰っていったから、クエの中にいる」という意見も出てきて、それぞれが自分の考えとして発言され、深まりを見せている。

『父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが』ってところで、顔も知らない父親たちは家族やと思って海は家やと思って海に帰っていった」という意見が出たところで「だから太一はクエを殺さへんかったんやな?なんで?」とたたみかけると、「大魚を殺してしまったら海が死んでしまう」というような意見につながっていく。シンボリックにクエを海の命と捉えてきている姿がそこにはある。指導者の指導計画によれば、「少年の父親たちが生きた海に寄せる熱いおもい」を理解し、「成長に影響を与えたものが周囲の人間の存在や海やクエの存在であることが主題として描かれていることに気づく」ことが述べられているが、このような形でその指導のねらいに限りなく近づいていることが見えてくるように思える。

この発言の流れの中で出てきたものをとらえて、「それを待っていた」ような投げ返しを指導者は行っている。なぜそのような投げ返しを行っているのか、が、この「海の命」の学習のテーマに深く関わることになるのだが、充分話し合いを重ねた上で指導として行われることがらの意味と位置づけ、そして実際の授業場面での扱われ方は研修として大きな意味のあることだと思ふので、そこを(流れのままではあるが)入れることにした。

ひととおり各授業場面の切り出し作業が済んだところで、コンテに沿って作ったそれぞれのプロ

写真 11 太一の生き方を考えよう



ジェクトに内容把握と理解がしやすくなるための「飾り」を入れ、研修が進みやすくなるための工夫をした。

【視点2 「ハンドサインの利用」に沿った切り出し】

日常的な学習活動の中で、この学級は6種類のハンドサインを用意しているが、実際に使われている主なものは「新しい意見」「同じです」「気がつきました」の3通りだった。このハンドサインの利用について6月と12月に取材している。6月の取材では、ハンドサインについて「お互いの意見の異同がわかる」とか、「参加している気持ちになれる」といった「よいところ」を挙げていた。

実は「海の命」の取組の中で、一度ハンドサインの利用をやめて話し合いをしてみようという提案があって、共通話題2の話し合いではそのようにしていた。この日のことを12月になってもよく覚えている子が何人もいて、「手もあんまり挙げられへんから、たくさん発表しているイメージがなくなってしまうかなと思うし、なんかハンドサインないと話しにくい。だからあった方がいいと思う」「ハンドサインがなかったら、なんか話しにくかった」という意見であった。そのようにこの学級ではハンドサインの利用が定着している。子どもたちに尋ねて撮影してみたところ、半年の間が開いていても同じような返事が返ってきている。

ところが、この日は、今までになかった形で発言が出る。「気がついていた人がいたら教えてほしいんだけど」という前置きで、いっしょに考えてほしいというものだった。それは個人の学習課題でもあるのだが、ハンドサインを半ば乗り越えるような形で出てきた発言だった。

また、テープ起こしの記録からこの時間の発言の流れを追ってみると、もうひとつ気がつくこと

がある。それは、子どもの発言が多様化していて、「同じです」「気がつきました」だけでなく「自分ならこうだ」というのが相次いでやりとりされているという点で、この点を見てみると学習活動がずいぶん深まってきていといえそうなのがある。写真12は、「共通話題3」についての話し合いの一場面だが、前頁でも述べたとおり発言が少しずつ違ってやりとりされており、この時にはハンドサインより先に発言が出るというような状況であった。

そこで、この視点に沿ってビデオを組み立てていくことを考えてみる。この半年の間のハンドサインの現れ方の違いや発言の多様化がみえるようにしたいと思った。このために、「やまなし」での「海の命」それぞれの話し合いの中でハンドサインが出てくる場面を切り出し、並べてみるとどうかと考えた。さらに、「海の命」では、話し合いが深まる中で次第にハンドサインが後回しのような状態になってくるのがみえてくる場面をつなぎ合わせてみれば、この学級にとってのハンドサインの意味が考えられる形にできるのではないかと思った。

学習の進み方にそういう変化がある一方で、ハンドサインについて子どもたちの見方はそう大きく変わっていない。そのことから考えられることはなんだろうか、そこも提示したいと思った。指導者は、子どもに求めることとして、授業に「まずは参加すること」という。これもビデオ記録の中に入れていたと思ったほどのことだが、学級経営の根本にはハンドサインそのものがあるのではなく、「あなたの話を私は聞きたい応えたい」という気持ちをもつことができるのが大切なことである、というのが重要な点であった。

そのことを形にするにはいくとおりも方法があるが、この学校・この教室で与えた形がハンドサインを使うことであったにすぎず、「それが子どもたちにとって合っているかどうか」は検証されなければならないという。

そのような視点で学級経営が貫かれていたことを見逃しては、子どもたちの気持ちを後回しにしてハンドサインを使うことに汲々とするようになる。指導者が自らそういう視点を持っていることは、単に一つの方法が「指導として良い」と鵜呑みにしてはいけないことを物語っている。

おそらくそういう学級内の関係をお互いに持ち得ていたからこそ、悪条件が重なってもこれだけ話し合いを子どもたちは深め合うことができ、9月の学習を充実させられたのではないだろうか。

写真12 ハンドサインの利用



(2) 視聴しやすい工夫=二次編集の第二工程 ①テロップ(文字幕)を作る]

ビデオ画面の中に挿入する視覚的な効果について考え、整理してみた。研修用のコンテンツ制作が目的であるので、そのために必要な条件を考えてみると、以下のようなことが挙げられる。

- (A) 視聴中のビデオのテーマが何であるかがいつでもわかるようになっていること
- (B) 研修のための要所で解説が入ること。これはテロップだけでなく、音声による解説も考えなければならないだろう。
- (C) 話されている言葉の不鮮明さを補うこと、あるいはボリュームを絞っても内容が理解できるようにするための工夫が必要。
- (D) 研修用ワークシートとの対応を考える。ワークシート上の課題とビデオ上の場面の対応関係が分かれば、一人でも研修は進むだろう。そのため、ロゴあるいはページ番号のような形で画面隅に対応関係が分かる工夫をする。

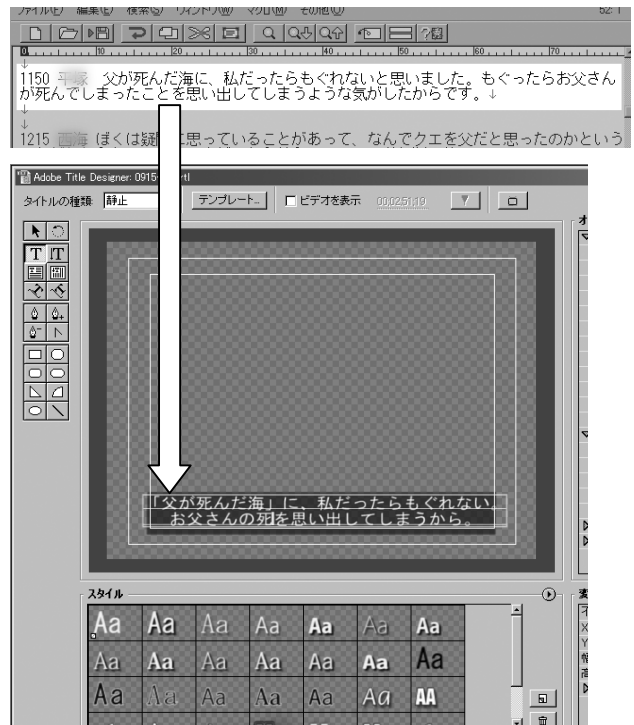
(A)のためには、場面がわかるためのロゴを作ってみることにした。画面右上に常時出しておき、視聴中のビデオのテーマがはっきりわかるようにする。

文字の背景を授業場面から少し区切ることができるよう、「座布団」(背景ファイル)を作る。今回の試作では、ペイント系のソフト上で300x75ドットの小さな黒い四角形に赤・緑・青の四角形を並べたものをあらかじめ作り、タイトラ上に入れた。別ファイルにしておくことで、ロゴが複数になっても、統一的に背景が入れ替えられるようにする。これをタイトラの上で半透明にして、その上にビデオファイルのテーマを重ねる。

(B)のためには、画面の中心に目立つ形で入れるもの考えた。課題や解説は、研修を進めていく上で欠かすことができないものであるから、一目で分かるものになるよう工夫する。

(C)については、子どもたちの発言や指導者の話を要約して提示することを考えた。国語の取材では、夏場であったために、エアコンの音が入ったりして音声鮮明に記録できなかった。特に、せつかくの子どもたちの発言が、ヘッドホンで何度も聞いてもまだ聞き取れない部分があるほどで、この状態のまま研修でスピーカから

図3-5 元発言(上)とタイトラ上での編集(下)

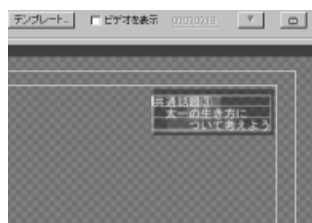


音を出せばますます聞き取りにくくなってしまふ。このような音を流れてくるままに聞いても聞き取れなくては研修にならない。場面場面の様子がきちんと理解できる工夫が必要だと感じたので、子どもの発言にテロップを入れることにする。

テロップには画面下に2行の入力エリアを作ることにする。あまり多いと読めないし見苦しいので、どれくらいの文字数にするのがよいのか試してみた。今回のビデオ資料は2種類のファイル形式で出力することになっていて、そのうちのCD-ROM(DVD-ROM)版に入れる方のはあまり解像度が高くできないことから、こちらの方で出力したときに読み出せる程度に文字数を制限する必要がある。そこで、フォントサイズを加減しながら、ニュース番組などテロップが多用されている放送番組も参考にして、1行あたりの文字数は20字程度にすることにした。したがって、最大40文字程度で収まるようにして、発言の意味が読み取れる程度に言葉を整理する必要がある。元発言と、それをタイトラ上で詰めていく作業の様子を例を図12-2に挙げる。あまり長くないものでも、このように限られた枠の中に要約し整理して入れていくには時間がかかるものだなあとつくづく思った。

話し言葉というものは文書に書き起こしてみると驚くほどあいまいで、文らしい文になっていない場合も多い。例えば間投詞が多くて長くなっていたり、論理関係や主従関係が不明確であったり

図3-4 ロゴを作る



する場合もあるし、重層的な複文になっていてなかなか区切りが来ないこともある。それらを切り詰めて 44 文字以内に収めるという場合にどのようにすれば元の意味を崩さずにすっきり表現できるか、ずいぶん悩みつつ作業を進めていった。

(D)では、研修場面がわかるためのロゴファイルを考える。実際にこのビデオを使って研修をするにあたり、ワークシートとの対応がわかりにくいのは困るが、一方で研修内容と直接関係がないため、あまり目立つものであるのも良くない気がする。そこで、今回は、BS 放送で一般的に使われているような半透明のロゴを入れるように考えた。さらに、仕上げの段階では見栄えをすっきりさせるために(A)と(D)とを統合することにした。

ところで、今回のように発言に合わせて多くのテロップを作るような作業をすることになると、Premiere のタイトラには少し不便な点が出てくる。

Premiere のタイトラは手軽にテロップを作ることができるが、少し弱点があって、同じ形式のものを作りにくい。今回特に不便を感じたことにファイル名を自由に操作できないことがある。

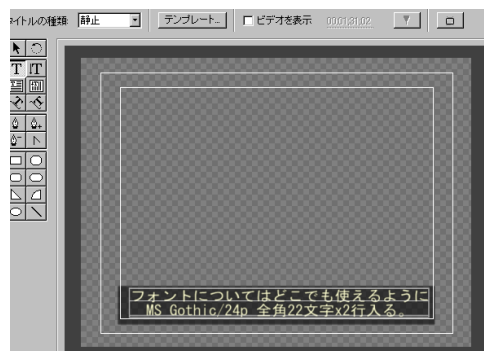
子どもの発言を画面上に示すためのテロップのような場合、場面が変わっても同じ位置に同じ大きさの文字を並べていくようにしないと場面転換のたびに文字の位置も大きさも異なってしまう、違和感が強くなる。このことは避けたいので、文字の背景の部分と文字の挿入位置が決まっている元ファイルを作っておき、そのファイルのコピーの上で文字を入れ替えるというような工夫を考えてみた。Premiere のタイトラはテンプレートが使えるようになっているので、新規ファイルを作るたびにそのテンプレートを読み込ませ下敷きようにして文字配置をすれば、そのような定型的なファイルをいくつも作ることができるのだが、終了時にひとつずつファイル名を入力していかなければならないという点では手順として煩雑でもあるし、たくさんのファイルを作るという点からいえばどこまで作ったか混乱しやすい。

そこで、コンテ上の発言記録とファイル名とが対比しやすいように一覧表を作って、その一覧表に沿って一気にテロップのファイルを作ってしまうようにしてみた。

まずテロップの元ファイルを作っておく。これには半透明黒の座布団(背景)とサンプルの文字列が入っている。この例では blackback24 という名前前で用意している。

次のような簡単なバッチファイルを作って、多

図 3-6 テロップの元ファイルを作る



めにそのテロップ用ファイルのコピーを作っておく。

```
copy blackback24.prtl 0910-01.*
```

```
copy blackback24.prtl 0910-02.*
```

こういう形で日付とコンテ内の発言に対応する番号のテロップの元ファイルがまとめてできあがり、ファイル名の管理が大幅に簡略化できる。

次に、コンテを見ながら、タイトラ上でそれぞれのテロップファイルに対応する文字列を入れていく。テロップだけでなく、画面上部の左右にある見出しやロゴのファイルを作るときには同じような方法を使ってみた。

〔②オープニングビデオを作る〕

おおよその研修用ビデオ本体ができあがったところで、オープニング部分のビデオを作ることにした。ここでは、研修の進め方、標題そして課題を提示することを兼ねている。子どもの楽しそうな雰囲気を始めたいと思ったので、休み時間にクラスで遊んでいるところを背景に入れることにする。12月に学級へ寄せてもらったとき、たまたま中間休みに学級で遊ぶ日になっていたらしく、全員がドッジボールを楽しんでいたのが収録させてもらった。この場面ではオーディオトラックを明るい雰囲気の音楽に差し替えている。フリー素材の音楽CDからPremiereで扱えるファイルを作り、オーディオトラックに流し込んで仕上げた。

写真 13 オープニング部



[③エンディングビデオを作る]

12月の撮影からこの部分も作った。学習に取り組む子どもたちの表情が本当に生き生きしていて、その姿をぜひどこかに入れたらと思った。指導者によれば、それまでの授業記録を視聴して初めて学級の子どもたちがどんな表情をしているのかに気がついたという。6年生になってからずいぶん生き生きしてきたものの、授業中の表情をビデオで見て驚いたそうだ。直接研修内容には関係ないものの、子どもたちの姿が生き生きするのは教員の立場としてとても嬉しくもあり、あこがれるものでもあるのではないだろうか。

写真 14 エンディング部



[④オーサリング]

ディスクがビデオ版とROM版の2種類あることから、オーサリング作業(構成作業)も2種類になる。まずDVDビデオ版用のオーサリングである。PremiereからプロジェクトごとにDVDビデオディスクで扱うmpeg2形式のファイルを出力する。

すべてのmpeg2出力が揃ったところで、DVDビデオ制作用のソフトウェア上でのビデオディスク制作作業に移る。試作版のものでは、DVD Workshopを使った。

今回のビデオディスクでは本編で扱うファイルが5本あり、さらにオープニングとエンディング用のファイルが2本ある。これらのうち本編分を目次(メニュー画面)に並べて対応するファイルをリンクさせ、再生時にメニューのクリックでそれぞれのビデオファイルが呼び出されるように準備する。試作の段階では、目次作りにはソフトウェアが添付している目次用のファイルを流用して制作してみた。

すべてのファイル配列作業が終了したところで、DVDビデオ用ファイルとして出力し直す作業に移る。

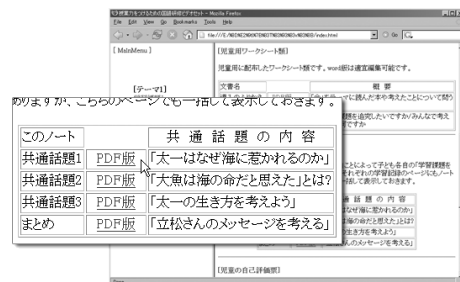
図 3-7 DVD オーサリング



こうしてビデオディスク版のビデオセットができるが、この中にはビデオ資料だけがある。先に述べたように、CD-ROM(DVD-ROM)版では、ビデオ資料の他にも、手元に印刷して使える資料ファイルを取り出せるようにすることを考えている。これを本研究のキーワード②「いつでもどこでも」や⑥「活用の方法」に沿って考えてみると、多くのコンピュータ上で扱える汎用性のある形式で制作されたコンテンツであれば、いつでもどこでも活用できるものになるだろう。手軽に呼び出せるように、また手軽に目次を作れるようにしたい、柔軟に変更もできて将来的なネットワーク上での利用も考えるということから、動画部分はmpeg1、資料部はPDFを使い、HTMLを使ってCD版の構成をすることにした。そうすることでwebサイトを閲覧するのと同じように一般的なブラウザがあればすべての資料を読み出せるし、オンライン配信が可能になればサーバ上に載せて利用できるようになる。そこで今度はCD-ROM(DVD-ROM)版ビデオファイルの生成をすることになる。

DVDビデオの制作時と同じように、PremiereからCD-ROM(DVD-ROM)に収録するファイルを出力する。CD-ROM(DVD-ROM)版ではDVDビデオ版の場合と違うmpeg1形式のものを使うので、ビデオの内容そのものは同一だがファイル形式が異なるため、改めてCDのためのファイルを作ることになる。

図 3-8 学習記録の提示法を考える



〔⑤CD-ROM (DVD-ROM) 版の添付資料構成を考える〕

CD-ROM (DVD-ROM) 版では、ビデオを視聴するだけでなく、取り出せる資料を添付することは先に述べた。その構成について考える。

資料には以下の3種類があると考えた。

- (A) 手を加えて指導に利用できるための資料
- (B) 手を加えることはせず、そのまま閲覧するための資料
- (C) 研修のためのワークシート

上の(A)で述べた資料としては、指導計画や児童に配布するための学習プリントの原稿などがある。学級や学年の実態に合わせ、手を加えて使うこともあるだろう。そこで、指導者の作られた原稿をそのまま(今回の場合は word のファイル)収録し、取り出したコンピュータの上で(word があれば)編集できようすることを考えた。また、変更が要らない場合もあるだろうし、同じ word が無い環境での利用も考えられる。そこで、そのまま印刷しても使えるようにするために、同一の原稿を PDF 形式で出力したものと併せて収録しておく。こうして2種類のファイルを用意しておけば、利用環境や用向きに合わせて閲覧したり印刷したり編集したりと、より利用しやすい指導資料になるだろう。

次に、(B)に挙げた資料だが、子どもたちの作品

図3-9 教師用指導資料類



や学習記録などは手を入れるものではなく閲覧するための資料である。こちらは、閲覧することができればよいので、画像ファイルとして提供することにする。

資料全体に目を通しやすいようにするにはどうしたらよいか考えた。個々の子どもが作ったノートは学習の流れに沿ってページが進む。個々の学習の流れを振り返っていくにはそのままの姿が

図3-10 学習内容ごとにノートを再構成



いいのだが、学習指導をするという立場からみると、同じ時間の記録を並列的に調べたい(たとえば共通話題②の記録だけ)ということも出てくる。このときに調べやすいのは、その同じ学習内容ごとに綴じ直した資料である。そこで、今回の資料化にあたっては、図2-17に示したように、個人のノートをばらしてしまっただ同じ内容ごとにまとめ直したような概念で再構成したものにしてから収録することにした。ちょうど授業終了後にプリントを集めたような状態になる。

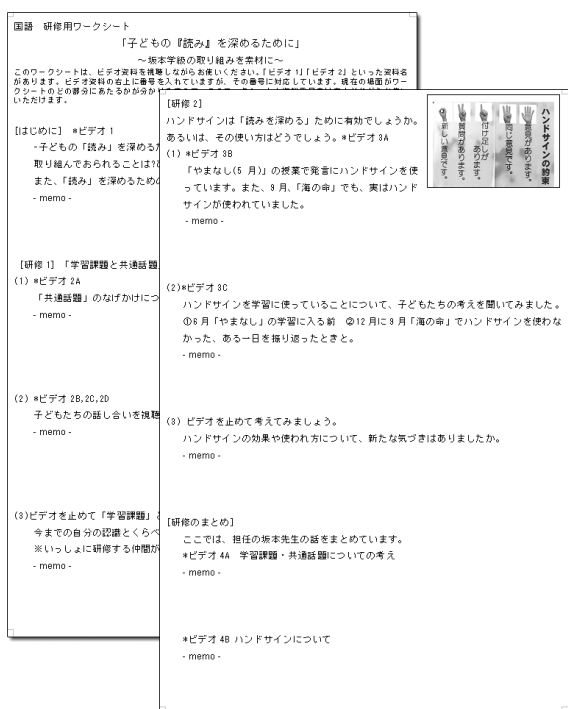
このような形で添付する資料の構成を決め、添付資料の制作に取りかかることになる。主な作業はPDFを制作することになるが、wordの原稿からはそのままPDFに出力すればよいものの、児童のノートについては少し手間取った。

児童のノートは一人分ずつしっかり貼り合わせて作られており、ページを切り放すことはできない。そこで、あらかじめすべてのノートをすべてのページに渡って個別のファイルとしてスキャナで取り込み、PDF製作用のAcrobat Distillerで作ったテーマごとのPDFファイルに挿入していくという方法を取った。こうして、共通話題についての3つの記録と学習後の感想などが別ファイルの形にまとまってCD-ROM (DVD-ROM) 内に収録されることになる。同じ時間の資料を突き合わせて比較するような利用法を考えてみると、個別のノートのページをめくって並べていくのに比べて手間も省けるのはもちろんのこと、その時間の授業全体を眺め渡していくことも容易だろう。

さらに、(C)に挙げた資料として、研修用のワークシートを作る。

2つの視点「共通話題・学習課題」と「ハンド

図 3-11 ワークシートを考える



サインの利用」をカギにしてこのビデオ資料を視聴することになるわけだが、その形態には、一人で視聴する場合、数人のグループで視聴する場合、職員研修のような形でコーディネータがいる場合などいくつかの形態が考えられる。いずれの場合にも当てはめられるように作りたいが、この資料の場合は**キーワード②**に示したように「いつでもどこでも」が基本的な条件だと考えた。つまり、ひとりででもビデオを視聴し、その流れに沿って当該箇所記入しながらワークシートの当該箇所使えるということに重点を置く。

そこで、ビデオが提示している場面を参照しながら感じたことや考えることを記入できるような形にしてみる。この試作ワークシートでは、視点として提示するものが「学習課題と共通話題」「ハンドサイン」の2つなので、それぞれの視点について1ページずつ記入する形で構成してみた。ビデオ再生中、立ち止まって考えてみてほしい部分の終わりで区切りがあるので、そこでしばらく考えをまとめてもらうことを考え構成してみた。また、グループでの研修の場合なら話し合ってもらえるようにも考えている。このワークシートもPDFの形でCD-ROM(DVD-ROM)に入れておき、利用者に取り出してもらえようとする。

このような経過で作ったビデオファイルと資料ファイルが揃ったところで、CD-Rに書き出し、CD-ROM(DVD-ROM)版の授業ビデオセット(試作版)が出来上がった。

第2節 よりよい活用のために

(1) 研修会での実際と再修正(三次編集)

【①研修会での反応】

前章で述べたような取材と編集の過程を経て、時間的にはずいぶん長くかかってしまったのだが、国語の研修用ビデオ資料が切り出しとテロップ入れについて一区切りついた。ナレーションや解説テロップが入っていないと未完成の状態だが、ここで、授業ビデオセットの中核としてのビデオ資料の内容について、何人かの先生たちに見ていただき、意見を聞いた。

このビデオ資料で研修を行うとすると、視聴後にはどのような感想が得られるのだろうか。またどのような点に問題があるのだろうか。この資料から得られるものを明らかにして、実際に研修に供することのできる確かなものに仕上げたいと考えた。

参加者には、実際に研修する立場になったつもりで、今回試作した国語のDVDビデオ版を一斉に視聴してもらおう。そして、CD-ROM版のビデオセットを配布し、主に添付資料について感想や意見を聞く。さらに、CD内に収納したものと同一の研修用ワークシートを印刷して用意し、そこに記入してみていただく。試作版のビデオ資料は、おおまかに2つの視点を提示する形になったので、それぞれの視点についてワークシートも質問紙も制作している。

ワークシートは、「子どもの『読み』を深めるための2つの視点からみて気づくことを記入する形にして構成してみた。

1つめの「共通話題・学習課題」については、この学習3回分が終わったところで、いったんビデオを止めて(DVD版ではそれぞれに区切りがある)、この視点についての「気づき」を記入する。今回のようにいっしょに見る仲間がいる場合は、その気づきを交流する。

2つめの「ハンドサインの利用」については、「やまなし」と「海の命」での使われ方を対比し、その効果や使われ方についての気づきを交流する。

さらに、この参加者の先生たちに、今回のような研修の在り方について質問紙を用意して配布した。

その中でビデオ資料の構成についての意見とCD-ROM版資料に添付している指導用資料の内容についての意見を記入していただき、公開できる改訂版のビデオ資料作りに使わせていただくことにする。

図3-12 ビデオ資料とセット構成についての質問紙

【B案】(クリップごとに?)
このビデオセットの構成についてお感じのことに近いものを選んで○をおつけください。

(1) だらだら伸びている感じがする。もっと短くした方がいい

オープニング	()	そう思う	()	そう思わない
共通話題・学習課題	()	そう思う	()	そう思わない
ハンドサイン	()	そう思う	()	そう思わない

(2) 研修のための視点(「共通話題・学習課題」、「ハンドサイン」)に沿った形でビデオの切り出しが行われていると思われませんか。

「共通話題・学習課題」	()	そう思う	()	そう思わない
「ハンドサイン」	()	そう思う	()	そう思わない

(3) 研修用資料として、指導案・児童用ワークシート(配布用プリント)・児童の作品(学習の記録ノート、自己評価票)を添付しています。研修用の素材として適切でしょうか。

指導計画

ワークシート	()	そう思う	()	そう思わない
児童の作品	()	そう思う	()	そう思わない
自己評価票	()	そう思う	()	そう思わない

(4) このビデオ資料をごらんになって、研修用資料として使うという視点から見て、どうでしょう。気になったこと、気づかれたことなどお書きください。

- ・場面が長く続きすぎる(3B)。途中で止まって考えられるポイントを作った方がよい。
- ・どこにどういう意図があるかが、ある程度教壇に立って経験してきた人にはわかる。従って解説が要る。
- ・視聴にコーディネータが要るのではないか。そのほうがいろいろ意見が出ると感じる。
- ・教師用ワークシートのつくりはもっとポイントを示した方がいい。おさえるところはきちんとおさえる、たとえば「共通話題」について2度の振り返りがある。
- ・それぞれのビデオの指導のポイント、そういうものはナレーションの形で入れたらいいのではないか。それがあってはじめて幅広く「いつでもどこでも」が可能になる。
- ・オープニングのテロップが見づらい。
- ・先生の顔のアップしかなくて子どもの反応がわかりにくいのは良くない。

この試写による検討を経て、その反省の上に立って、ビデオの内容を何カ所か改訂していくことにする。

【②視点の再検討】

ビデオ資料を2つの視点から構成したことは先に述べたが、今回の研修を経た再検討の過程で、そのうちの1つであるハンドサインについて再度考え直してみた。意見については以下のものであった。

- ・ハンドサインに時間をかけているが取り上げている意味が不明である。
- ・ハンドサインについての意味と効果が整理されていない。

子どもたちにとってハンドサインを使うことは参加の一形態であるし、伏見住吉小での場合はうまく機能している。しかし、これは、指導者自身が述べておられるように「参加させるための方法であって、これでなければならぬものではない」という性質のものである。だとすれば、単にハンドサインとはこういうものだということに「ハウツー」として提示してしまうことは、それほど研修として価値のあるものとも思えなくなってきた。その点からみて、取材活動の中ではハンドサインの部分を意識していたし、実際にビデオ制作にあたっては、同一場面でハンドサインのある部

ビデオ資料ひとつひとつは4分～10分程度のまとまりになっているが、合計してみると40分近くのものになっている。こういった構成を長く感じるならばそれは良くないだろうし、研修の視点から見たときにそれに沿った内容が切り出されているかも確かめたい。また、この日に配布したCD-ROM版には実際に読み出したり印刷できる形で電子化した添付資料が入っているが、それらの添付についての適切さや活用の可能性についてどのような感想をもたれるかも知りたい。

そこで、図3-12のような質問紙を用意して、ビデオの視聴中や視聴後にワークシートと併せて印象を記入してもらおうようにし、また感想を記入する項目も挿入して意見を聞き、これらを参考にしてビデオの再制作をすることにした。未完成部分があり、入るべきところに解説が入っていないような箇所もあったのだが、この日の研修会で出た意見を参考にして、ビデオ資料や添付資料の構成をさらに再検討し、今回の構成の在り方や視点のあて方について反省した上で改訂作業や編集作業をさらに続行することにする。

試写を終えて感想を述べていただいたところ、いくつか大きな問題になったことがある。「視点が絞り切れていない」ということと、そこから派生する「無駄な場面がある」「ビデオで何を伝えたいのか」というテーマそのものの問題であった。そういった編集の未熟な点やマイナス点についての指摘は以下のものであった。

分・ない部分を用意していたけれども、今回の授業ビデオセットからは省くことに決めた。

今回の取材を通じて一番絞り込める大事な点は、「共通話題を通じて子どもが個々の学習課題に迫っていく」ということであった。したがって、この点を追求し直すことにする。

〔③コンテを練り直す〕

研修にとって必要なことは授業の流れを追うことではなく、授業の要所を見て気づきを深めることである。だとすれば、その要所をより明確に示すべきであるというのが一番の大きな課題であろう。ここでは「学習課題と共通話題」という方法が用いられているが、学ぶべきことはその方法ではなく、なぜその方法を持ち込んでいるかという点であって、視聴する人に対してそのような投げかけができるための工夫が必要だといえる。

そこで、おおよそ次のようなポイントを盛り込む形でコンテを再整理し、ビデオを組み直す。

また、これと併せてワークシートを考え直す。

研修課題の提示として、

坂本先生は読みを深めるために「学習課題」と「共通話題」をなぜ使ったのか。その取り組みを紹介する。

§ 1

「なぜ2つのことがらを投げかけたのでしょうか」ここでは、個々の学習課題の解決のために共通話題を使って話し合おうという方法についての説明と子どもたちの反応を描く。

§ 2

では、一人一人の課題から共通課題を作るためにどんな工夫をしてきたのでしょうか。」子どもたちから学習課題を聞き、それを共通話題として組み立てていく。

- ・ 共通話題を通して学習課題に戻らせる。その違いがわかる場面を切り出す。子どもがどう変わるかを見る視点の提供。
- ・ 共通話題を作る。共通話題によって学習課題が深まる。
また、ワークシートに、共通話題→学習課題の流れがみえるものを。
- ・ 共通話題③では、先生はなぜ子どもの話し合いに介入したのだろう。それはどんな意図をもっていただろう。
あとで学習の深まりを確かめられるように発言を切り出す。

指摘を受けたように、共通話題を通じて個々の学習課題にせまっていくという流れが書き込みながら考えられるものにしていく。

このような重要な指摘も受けたが、一方で、いくつかプラス面の評価もいただいた。それは、①研修の視点の提示があり、②視点に沿って(不完全ながらも)編集されていて子どもの学習の深まりがその視点に沿って見て取れるという意見で、そのような見方をしていただけるものであれば、キーワード①④として考えた「視点の明示」は意味のあることであろうと思えた。このことは、よりよい編集に生かしていきたい。

(2) 今後のために

ビデオ視聴という形態の研修は、かなり前から行われてきた形態の一つにすぎず、とくに目新しいものではない。それを今あえて本研究で取り組み進めようとする理由の一つには、コンピュータの普及という社会的背景がある。現在個人で手に入るコンピュータにはかなりの力があって、全くビデオテープを使わない環境で出力まで行う、いわゆるノンリニア(フルデジタル)の制作環境が作りやすい。本研究でも取材以外にはテープを使わないで編集を行ってきたが、かつては大がかりなスタジオや機材が必要だったビデオ制作環境が、机の上で実現しそうなところまで来ている。つまり時代はそこまで変わってきている。

このようなことを背景にして、学校では何ができるのか。それは、子どものためのビデオ教材作りができるということでもあるし、また、教員が自分たち自身の手作りで研修用資料を作ることができるということでもある。テープを使わない編集環境は、いくらでも柔軟に素材を変化させていけるし、巻き戻しの手間が要らないことから、手短にちょっとした資料制作がやりやすい。

しかも、その手作りの資料はオンラインで提供できる可能性をもつ。このことは、学校を超えて教員同士が交流しながら研修を深め合え、「授業力」をさらに高めあえていける可能性を秘めている、ということを示している。ここに、ビデオ記録を主体にして研修資料を作っていくことの利点があると考えられる。

本研究で制作してきた授業ビデオセットは、研究協力員をお願いした学校へ出かけては少しずつ撮影・検討などの取材を重ねてできあがったものであり、また、研修用にまとめていくことそのものを研究として検証作業までを行っているので、かなり時間的に長くかかることになった。校内の、

たとえば教科部会や学年会などでもこういう形で資料制作をしあうことができれば、すぐれた研修資料として使えるだろう。手軽でしかも効果の高い研修は、参加者にとって視点が明示されていれば実現できることであるから、校内でそういった打ち合わせさえすれば、資料作りは容易なことではないだろうか。

今日、コンピュータはすっかり普及したし、インターネットへの接続速度はADSLや光ファイバの普及に伴い向上して、動画の送受信もますます一般的なことになっている。このことは、個人で利用できるメディアがネットワークで結ばれたものに広がりつつあることを示している。そのような社会的状況の中では、こうした形態の研修もまた一層普及していくことができるだろう。そのような社会的な背景と教員の主体的な研修への参加意欲がバネとなって、研修資料もまた充実していくことを願いたい。

これまで述べてきたような経過を経て、今年度は授業ビデオセットを制作してきたが、実際に編集作業をする中で、いくつも課題がみえてきた。制作のための技能的な側面と資料構成の側面とがある。

収録を振り返ってみると、収録については本当に苦心した。業務用のマイクを使っても明瞭な収録は難しい。特に、夏場の、エアコンから出てくる雑音のような連続雑音は、簡単には消去できない。一番の雑音対策はマイクを子どもに近づけることではあるけれど、授業中にマイクをぶら下げたブームを振り回すのは学習活動にとってあまり良いものではないようにも思う。ただ、本当に困ったことは、雑音に紛れたりして子どもの声が不鮮明で聞き取りにくく、夏場の収録後は記録の整理にあまりにも時間がかかりすぎてしまい、なかなか資料制作の本編に入っていくことができずにいたことである。3本のマスターテープから場面ごとに音を切り出す作業もまた時間がかかるもので、このあたりは解決のために収録時の音声係を一人依頼するようなことも考えてみたい。授業記録のために何人かが教室に入るのは子どもにどう受け止められるかという新たな問題も発生するが、著者としては比較的楽観的に考えてもいいのではないかと思う。授業に参加している子どもたちにとって、監視されているような圧迫感があるのならば問題だが、「自分たちのがんばっている様子を見てくれている」という支援のまなざしを感じることができるならば、あまり大きな問題ではないのではないだろうか。一般の授業参観でもい

えることだが、佐藤学のいう「その教室の時空を授業者と子どもと共に生き、授業をともに楽しむ」(23)のような姿勢を持って参観に臨んでいけば、取材活動も学級にとけ込んでいくことができるだろう。

廊下側のカメラから撮った映像は窓から入った光のため、子どもの顔がかなり暗く映ってしまい、表情がわかりにくくなることがある。国語の授業の場合、子どもの発言が中心になって学習活動が進んでいく場面が多いので、このように表情がわかりにくくなるのは残念な気がした。

今回の取材で使ったビデオカメラは、こういう場合には手動で逆光補正ができ、ある程度は映り具合を意図的に変えることができる。しかし、それでも、撮影中には、ビデオカメラの移動やズームに気を取られていて補正にまで手が回らない場合もあり、画面が暗いまま撮影し持ち帰られるテープもある。そういう記録の場合はコンピュータ上で補正作業をすることになる。編集に用いたPremiereには明るさの補正用フィルタプログラムがあって、撮影時と同じような補正作業ができるようにはなっているが、それも「ある程度」のものであって、やはり元々バランスよく撮られている映像に比べるとずいぶん見栄えは良くない。

しかも、こういった補正フィルタを使うと、テープやファイルへの出力前にかかなりレンダリング(補正など意図した効果を反映するファイルを出力できるようにする作業)のための時間をとられてしまうことになり、編集効率が下がる(レンダリングは極端にコンピュータの力に依存する)。従って、急いで編集作業を進めたいときにはなるべくそのようなフィルタを使わずにすむように心がけることが必要だが、そうするためには撮影時にカメラを制御してよりよい状態で記録しておくように注意が必要である。授業の場面は刻々と変わっていくので、そこまで細かく撮影条件を変えていくのは難しい面もあるが、一方で大切なことは「何が撮りたいか」という視点の問題だろう。逆光で少し画面が暗くなっても、それで研修価値が下がるものでもない。

研修用に資料を制作するとき、いつも問題として突きつけられた気持ちになることは、「授業記録に研修として何を求めるか」ということ、そして、「整理の段階で求めることにかみあう記録が得られるか」ということだった。取材活動の中では、子どもとっしょに授業を受けてしまい、素朴に感動しているうちに授業はどんどん進んでいく。その授業を取材しながら研修のための資料として

どう視点を提供すべきなのか、そこを見出すことが一番大切なことであつたらう。この点は指導者との打ち合わせなくしては進まない。研究の出発点を振り返ってみても、ビデオ撮影は授業記録を短く再編するためのものではなかった。7月に収録した「やまなし」のテープ記録を文に起こして整理し終えたのは10月に入っていたが、この時期には同時に指導者と打ち合わせながら9月の「海の命」も収録していて、それぞれの単元を振り返りながら研修のための切り口が確定できたのは11月になっていた。研修のために切り出せる視点とそれに合う場面の組み合わせを整理していく作業には、かなり時間がかかる。今回の国語の場合、長い記録の中で子どもの「読み」を見ていく作業でもあり、編集のために時間を要するのは必然ではあるが、今後は視点の設定のしかたもまた検討していくべきだと思っている。研修をする点からみても、研修資料を提示するという点からみても、こうしてオンライン版の研修用資料を作ったり利用したりを「いつでもどこでも」できるような環境が整備されていくことを望みたい。

現在の光京都ネットではいくつか解決すべき課題が残っていて、今すぐにこうして制作した資料をネットワーク上で公開することはできないが、それは、制度面の問題であるにすぎない。資料の著作権保護や個人の肖像権保護といった法的側面は、絶えず当該者と連絡を取ることで解決へ向かうことができるし、ネットワーク社会が抱える個人情報保護の観点からも遵守すべき課題はあるものの、子どもたちや保護者の了解が得られる範囲をはっきりさせる中で、また解決の道が開けるだろう。今回の3校への取材では、こうしたことについて、保護者から了解を取ることができるといふ指導者に授業提供をお願いした。これがなければ、例えば肖像権の問題がすぐに絡み、取材活動すらおぼつかなくただらう。今回はそういう問題をについてクリアできるという好条件の中でネットワーク配信を仮定したビデオ資料制作に取り組んできたし、実際に安全性の確保できるネットワーク上配信できればと願っている。とりわけ、光京都ネットは学校間のネットワークとしてインターネット側からは侵入されない仕組みが確立しているので、それらの課題解決のための道のりはそう長くないように思われる。研修のために、せつかくのそのすぐれた仕組みを活用できる日が来ることを期待したい。

(24) 前掲 注(23) p124

おわりに

日常的な教材研究の中で、教材製作のひとつとして短編のビデオ資料を作るような作業は何度かしてきたものの、今回のように長期にわたる取材をもとに研修用資料という視点でまとめ、さらに添付資料を組み合わせるといふようなところまでの大規模なコンテンツ制作はかつて経験したことがなく、構成を考えたり資料を整理していくのには思いの外時間がかかってしまった。学校に勤務しながらいつでもすぐに使える研修用資料があったらなあ、という気持ちで今までいたことを、今回このようにして概念的に近い形でまとめることができたことは、自分の望む資料の形を示すことができるという意味で、夢が叶うような気持ちになれた。

作品の編集は拙くて気恥ずかしいが、資料制作と提示の在り方の一つとして見ていただければと思う。校内には教員として学びたい優れた実践がありながら、毎日それは記録に残らずに消えていく。日常の取組はもとより、部会や学年会などの実践記録を残しておきたいときに、どんな構成にすれば、その実践記録は使いやすい資料として残っていくのだろうか。

何よりも①研修のための視点をはっきりさせておいた上で②指導者にとっても子どもにとっても、また研修者にとっても利用できる資料を電子化しておくことがポイントではないかと考える。その意味でも、校内での研修用資料を制作する際に、今回の研究で用いた方法を参考に、少しずつ力を出し合ってまとめたことが研修効果の高い資料として残していけるのではないだろうか。

私たち教員が個々の力量を高めていくために欠かせないことは、いわゆる「ハウツー」を積み上げること以上に、先輩の実践に学ぶ機会をもって、子どもたちとのかかわりの在り方を見つめていくことであるだろう。どんな準備をしてどんな関わりを持ったときに子どもはどう変わるか、ということをとくさん見たり聞いたりして積み上げていく中で「授業力」は鍛えられるものではないかと思っている。その積み上げのための方法として、本研究が少しでも参考になればと思っている。

最後に、今回、研究協力員として授業や指導資料の提供を快諾していただいた伏見住吉小学校の坂本香代子先生、六条院小学校の久保田潤子先生、高倉小学校の林正和先生、そして各学校長はじめ教職員の皆様に深く感謝し、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。